

# 平成30年度 事業報告について

# 平成30年度事業報告について

## はじめに

平成30年度、大阪市博物館協会は設立9年目、公益財団法人としては7年目を迎えた。これまで大阪市から受託してきた博物館・美術館の管理運営は、平成27~31年度の5年間の指定管理（停止条件付）の内4年目となり、31年4月の地方独立行政法人設立を受けて、年度末をもって指定管理を終了した。

大阪市においては、平成28年12月、博物館群のめざす姿やその実現に向けた取り組みとして「大阪市ミュージアムビジョン」が策定され、その実現にふさわしい経営形態は地方独立行政法人であるとしたうえで、29年3月、「博物館施設の地方独立法人化に向けた基本プラン」が取りまとめられ、その中で地独法人の平成31年4月の設立をめざすとされた。大阪市では地独法人化に向けた具体的な設立準備が進められ、当協会としても大阪市の状況を踏まえて、法人設立に向けた準備を鋭意進め、円滑に移行するための作業を主体的に進めてきたところである。昨年2月の大阪市会本会議においては、「地方独立行政法人大阪市博物館機構定款の制定について」が可決され、法人の目的、名称、業務の範囲等について定められ、11月には中期目標等の承認も得て、本年4月に地方独立行政法人大阪市博物館機構が設立され、博物館にかかる事業等が承継された。

一方、大阪文化財研究所は文化財の調査研究事業を実施しつつ、大阪市・大阪市教育委員会と組織体制と業務のあり方について検討を重ねた。大阪市教育委員会では、今後の埋蔵文化財行政を適切に推進するには、あるべき体制の設計に十分な検討が必要であるとともに組織構築に相当の期間が必要であり、当面の間は「豊富な経験・実績を有する文化財研究所の活用が必要」とされた。そこで当協会は、本年4月に「一般財団法人 大阪市文化財協会」と名称を変更し、文化財研究所業務を行う大阪市の外郭団体として文化財調査を継続しつつ、大阪市・大阪市教育委員会及び関係諸機関と検討を重ねていくこととなった。文化財は市民の財産であり、新たな発見や研究の成果を広く公開することはこれまでとかわらず、大阪市博物館機構とは強固に連携してそれらを実施していく。

当協会においては、この間、大阪市の地独法人化を踏まえた準備作業、文化財研究所の今後のあり方についての取り組みを進めたことに併せて、各種の事業を施設ごとに、また相互に連携しながら実施してきた。以下、平成30年度事業について報告する。

### 1. 協会事業の位置づけ

協会事業を公益目的事業・収益事業等として位置づけ、平成24年4月から公益財団法人として事業を実施している。

#### （1）公益目的事業

この事業については、次の9事業で構成されており、隣接する分野の事業を相互に関連

づけて総合力を發揮することにより、一層の効果を上げている。

- ① 埋蔵文化財の発掘調査と保存科学分析事業（受託事業）
- ② 文化財や博物館関係資料の調査研究事業（自主事業）
- ③ 保存科学分析技術の開発と文化財等資料への応用事業（自主事業）
- ④ 文化財等資料を活用した展示・公開事業（自主事業）
- ⑤ 講座等による教育普及や人材育成事業（自主事業）
- ⑥ 体験活動事業（自主事業）
- ⑦ その他活動（自主事業）
- ⑧ 文化財関連施設管理・活用事業（受託事業）
- ⑨ 大阪市立博物館・美術館管理運営事業（指定管理による受託事業）

#### （2）収益事業等

- ① 収益事業

施設の一部を売店・食堂等として使用することで、来館者サービスの向上やその収益を公益目的事業に充てることを目的とする事業

- ② その他の事業（相互扶助等事業）

友の会会員に対して行う講演会等を通じて、友の会活動の推進や会員の美術・東洋陶磁に関する公益目的事業に対する理解を深めることを目的とする事業

## 2. 協会の経営計画

経営計画は平成28年6月に策定され、団体のビジョン、行動指針（計画）、経営目標が定められている。

#### （1）団体のビジョン

- ① 大阪市の博物館・美術館の実績・伝統を継承するとともに、インバウンドなどの環境の変化を見据えながら新たな魅力を創出する。
- ② 都市大阪にふさわしい、国内外からのさまざまな利用者ニーズに応えられる博物館をめざす。
- ③ 大阪市の博物館・美術館の相互連携によって総合力を発揮し、国内外への都市大阪の魅力の発信拠点をめざす。
- ④ 35年をこえる遺跡の考古学的調査を活かした確かな知識と技術にもとづき、文化財の幅広く総合的な調査研究を行い、その成果を広く発信する。

#### （2）行動指針（計画）

- ① 実績・伝統により蓄積された財産を継承し、収集・保存、調査・研究活動により財産の充実をはかり、さらに社会環境の変化に応じた有効活用をはかる。[ビジョン（1）]
- ② 大都市「大阪」で、集中して立地する特性を活かし、市民の博物館施設利活用を促すとともに、社会資源や産業界との連携をはかることで、まちの活性化と発展に貢献する。[ビジョン（2）（3）]

- ③ あらゆる世代、さまざまな利用者が、多様な学びや活動の場として活用するための支援と多言語化を含めた環境整備に努める。[ビジョン（2）]
- ④ 知識・経験・技術等を共有したり、展示や広報での連携を通じ、多様で質の高い事業を展開する。[ビジョン（3）]
- ⑤ 連携や協働を通じた博物館活動の活性化と、柔軟な発想により、新たな都市魅力の創出をはかる。[ビジョン（3）]
- ⑥ 国内外に向けてさまざまな手段で情報発信し、新たな魅力を伝える。[ビジョン（3）]
- ⑦ 発掘調査成果の迅速な公開に努めるとともに、博物館と連携しつつ、その積極的活用をはかる。[ビジョン（4）]
- ⑧ 安定した経営のため、博物館施設や文化財研究所において寄附金・協賛金など外部資金を含めた収入の確保を図りつつ、経費については増加要素もあるが、様々な削減に努め、効率的な運営を行う。

### （3）経営目標

目標1 指定管理4施設全体の常設展入館者数の増加

（目標）5年間で2%増 平成27年度657千人 → 平成32年度670千人  
[平成30年度] 729千人

目標2 各館の事業成果や広く国内外の作品を紹介する特別展の充実

（目標）年間で13本程度を開催  
[平成30年度] 13本

目標3 講演会や体験学習等を通じた資料や研究成果の積極的公開・活用

（目標）年間500回・参加80,000人程度を維持  
[平成30年度] 499回・68,919人

目標4 指定管理4施設全体での学校利用の促進

（目標）年間延べ1,000校以上を維持  
[平成30年度] 1,056校

目標5 当協会所管の各館所並びに（公財）大阪科学振興協会・大阪市立大学など関係機関との連携事業の展開

（目標）年間140件以上を維持  
[平成30年度] 139件

#### 【大阪市博物館協会 基本方針】

1. 各館の実績・伝統を継承するとともに、新たな魅力を創出します。
2. 都市大阪にふさわしい、さまざまな来館者に応えられる博物館をめざします。
3. 相互の連携によって総合力を発揮し、都市大阪の魅力の発信拠点をめざします。
4. 点検・評価を行い、ニーズに則した事業の実施と効率的な運営をめざします。

## 1 大阪市博物館協会の概況

当協会では、平成 30 年度において、指定管理施設の常設展入館者数の増加など、5 つの経営目標を掲げ、その達成に向けて取り組んできた。

博物館・美術館の常設展入館者数についてみると、6 月の大坂北部地震、9 月の台風 21 号上陸による関西国際空港の閉鎖など、インバウンド来館者の減少につながる要素が多かった。そのなかで、入館者数は前年度（713,313 人）を上回る 729,762 人を数えたことは特筆できる。特別展の開催回数は 13 回で目標値を達成し、NHK 大河ドラマ展「西郷どん」、海外展「ルーヴル美術館展」「フェルメール展」などの大型展が人気を呼んで多数の来館者を集める一方、「きのこ！キノコ！木の子！」「江戸の戯画」「高麗青磁」「大阪の米騒動と方面委員の誕生」などの自主企画展も好評を得た。特別展の入館者数は 813,792 人となり、前年度（606,019 人）を大幅に上回る来館者を集めた。このことは、特別展は企画内容によって増減が激しく、単純に年度ごとの増減比較は意味が乏しいことも示している。常設展と特別展、および美術館の地下展を合わせた入館者数は 1,830,123 人となり、前年度比 113% と好調であった。

講演会や体験学習等については、実施回数・参加者数とも前年度を上回り、回数はほぼ目標通りとなった。学校団体利用については、児童・生徒数の自然減に加え、校外学習に充当できる時間の減少、観光バス料金の値上げ等により近年は減少傾向であったが、平成 28・29 年度につづき目標を達成することができた。連携事業では、大阪市立大学との包括連携協定に基づく事業をはじめ、各館・研究所相互や関係先との日常的な取り組みにより、ほぼ目標回数に迫る 139 回を実施した。

平成 30 年度の決算状況については、経常費用が経常収益を上回り、当期経常増減額はマイナス約 9,223 万円となった。大阪文化財研究所における文化財調査受託事業収益は減少したが、指定管理 4 館において観覧料収益が増加したことにより、経常収益は増加した。また、文化財研究所での工事請負費は減少したが、指定管理 4 館の修繕費等が増加したことで、経常費用も平成 29 年度決算額を上回った。費用の増加が収益の増加を上回ったため、正味財産増減額はマイナスとなった。

館蔵品の収集では、寄付による収集が中心となっている。大阪歴史博物館では 1,130 点の寄付を受け、30 年度末館蔵品総数 144,444 点。自然史博物館では 53,029 点の寄付を受け、30 年度末総資料数 1,772,231 点。美術館では 5 件の寄付を受け、30 年度末館蔵品総数 8,495 件。東洋陶磁美術館では 287294 点の寄付を受け、30 年度末館蔵品総数 7,391 点となった。

平成 30 年度は、文化庁補助金を活用して、広報の充実をはかり、また博物館利用者の調査を実施して、魅力向上をめざした。

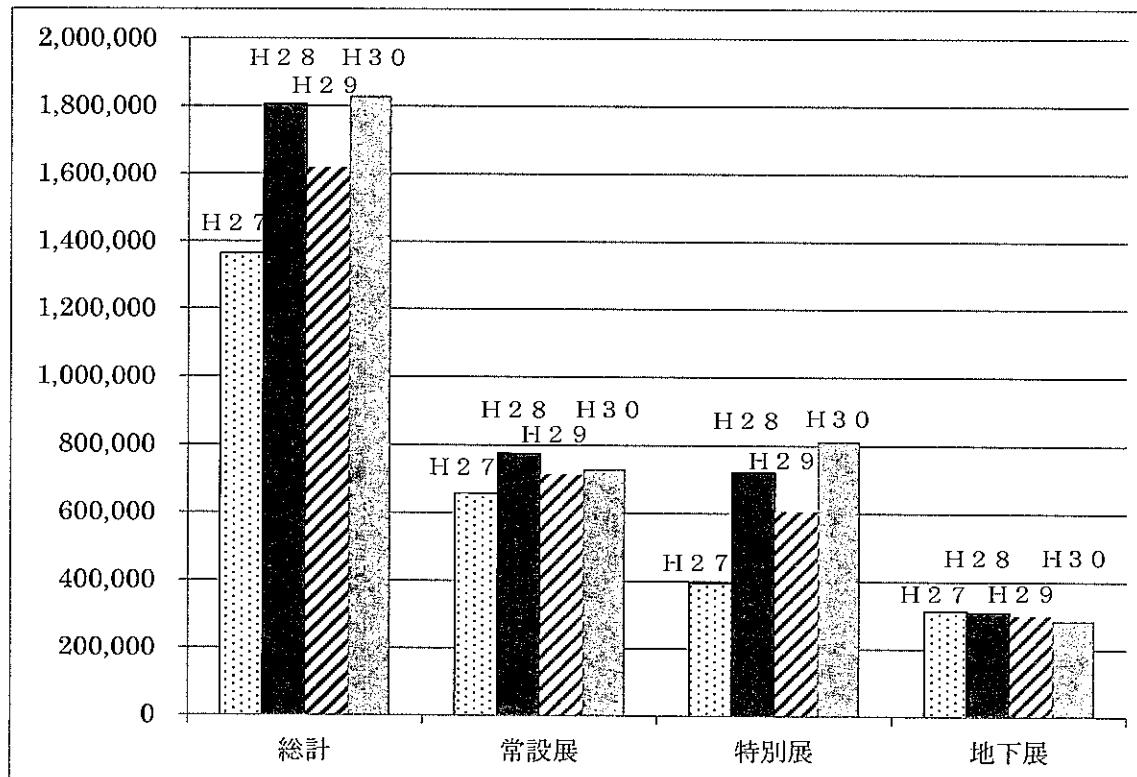
平成 31 年度は、地方独立行政法人化により博物館運営事業が移行されるが、引き続き発掘調査受託をより積極的に獲得し、効果的・効率的な経営に努めてまいりたい。

## 各館の入館者数

単位：人

		大阪歴史博物館	大阪市立 自然史博物館	大阪市立 美術館	大阪市立 東洋陶磁美術館	合計
常設展	28年度	391,862	244,587	19,773	118,749	774,971
	29年度	355,615	193,431	68,556	95,711	713,313
	30年度	315,275	228,182	103,375	82,930	729,762
特別展	28年度	108,771	133,483	361,906	116,612	720,772
	29年度	58,770	201,035	254,653	91,561	606,019
	30年度	87,176	77,989	568,984	79,643	813,792
地下展	28年度	—	—	309,404	—	309,404
	29年度	—	—	299,687	—	299,687
	30年度	—	—	286,569	—	286,569
小計	28年度	500,633	378,070	691,083	235,361	1,805,147
	29年度	414,385	394,466	622,896	187,272	1,619,019
	30年度	402,451	306,171	958,928	162,573	1,830,123

入館者数の年度比較（左・27年度、中左・28年度、中右・29年度、右30年度）単位：人



## 2 ミュージアム魅力発信事業

協会では、経営計画に基づき、協会各館・研究所が相互に連携した事業、外部の関係機関と連携した事業、協会としての共同広報事業などを「ミュージアム魅力発信事業」として実施し、民間事業者等とも連携を行っている。平成30年度は、博物館・美術館ポータルサイトやSNSアカウントの運営などを行い、民間事業者と連携して広報誌「Osaka Museums（大阪ミュージアムズ）」を発行するなどした。

学校連携・大学連携では、「教員のための博物館の日」を継続して行い、大阪市立大学との連携事業としてはシンポジウム「豊臣大坂城研究の最前線」、講演会「生き残れ！植物たちの多様な繁殖戦略」など、市民が関心の高いテーマの催しを実施した。

また、文化庁補助金を活用し、大阪市立科学館、大阪中之島美術館準備室、大阪観光局等とも連携して、博物館利用者の調査や大阪関係資料の掘り起こし、遺跡パンフレットの刊行などを行い、ミュージアムの魅力向上に努めた。

### 1. 広報・発信事業

平成29年度にリニューアルした広報誌「Osaka Museums（大阪ミュージアムズ）」については、第6号から第9号までの4号を発行した（6月、9月、12月、2月、各5万部）。協会が運営する各館・研究所と科学館の魅力や展覧会情報などを新たな視点で編集し、幅広い利用者に向けて発信して好評を得た。大阪市内外の博物館・美術館や、図書館、区役所等の公共施設、生涯学習施設のほか、ホテル、銀行や大型量販店をはじめとした商業施設等にも設置した。

各館・研究所の広報活動を支援するため平成26年度に開設したポータルサイト「Osaka Museums」については、28年度に文化庁補助金により多言語化し、海外への発信を強めている。また、同ブランドのSNS（Facebook、Twitter）による情報発信も実施した。

ホームページの平成30年度のアクセス数は月平均9,909件で、総アクセス数は118,907件を数えた。Twitterフォロワー数は、29年度より約600増の3,215となり、ツイートインプレッション（ツイッターを見た人）の数は456,572、Facebookの「いいね」数は1,074であった。また、29年度に引き続き、動画共有サイトYouTubeに大阪市の博物館施設10館を紹介する多言語対応（日・英・中（繁・簡）・韓）の動画を公開した。これは文化庁補助金を用いて制作した「Osaka Museums」10館を紹介するプロモーション映像で、年間の総視聴回数は9,011回であった。ホームページのアクセス数は横ばいであるが、SNS、YouTubeのアクセス数は増加する傾向にある。

その他の共同広報の一環として、関経連主導の外国人旅行者向け統一交通パス「Kansai One Pass」や、大阪市交通局の夏・冬休み事業である「おでかけ KID'S サマーPass」、「おでかけ KID'S ウィンターPass」等に協力した。

## 2. 文化庁補助金による魅力向上の取り組み

平成 30 年度文化庁「地域と共に創した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」補助金を活用し、「ミュージアムと地域を活性化させる魅力発信事業」に取り組んだ。大阪歴史博物館を中心館として、協会各館、研究所および科学館、中之島美術館準備室が加わり、補助金総額は 14,864,403 円である。

博物館施設の現状調査と分析については、利用者へのインタビューやインターネットを用いた大規模調査、学芸員によるワークショップ、有識者会議などを実施し、利用者分析に基づく博物館のブランドづくりに言及した。情報発信としては、広報誌「Osaka Museums (大阪ミュージアムズ)」の印刷・配布を行い、また 2 月には各館および科学館、中之島美術館準備室を紹介する増刊号を刊行した。地域の魅力を引き出す事業として、歴史博物館では大阪関係の歴史資料を掘り起こして整理・撮影・展示などを行い、研究所では大坂城跡を紹介する多言語パンフレットを作成した。また、29 年度までに実施した多言語化の取り組みについて、外国人アドバイザーによる点検作業も実施している。

本事業は、31 年度も継続申請しており、博物館と地域のさらなる魅力向上に努める。

## 3. 民間事業者との連携、民間ノウハウの活用

民間事業者との連携については、広報誌「Osaka Museums (大阪ミュージアムズ)」の発行を市内の編集プロダクションと連携して実施した。美術館では、障がい者特別鑑賞会を三菱商事株式会社と連携して、特別展「フェルメール展」開催時の 2 月 23 日に行った。

また、大阪観光局などと連携して、博物館施設のホール等を貸し出してイベント、パーティー等を実施するユニークベニューに取り組み、10 月に自然史博物館のポーチで個人の結婚披露パーティーを実施した。また、12 月には大阪観光局等主催の「大阪 MICE デスティネーション・ショーケース」(大阪市中央公会堂) に出展し、ユニークベニューの PR を行った。

## 4. 教育普及に関する連携

### (1) 小・中学校との連携

小中学校との連携については、平成 25 年度から継続して「授業に役立つミュージアム活用ガイド」を活用し、主に市内の校園長会や教育研究会との連携を深め、積極的に学校団体利用の促進をはかった。校外学習の決定時期である 3 月に合わせて、30 年度末にも改訂版を増刷し、大阪府内の学校への情報提供の取り組みを進めた。

平成 30 年度の学校団体利用総数は、29 年度と比較して微増した。近年、交通費負担など学校側の事情もあり、小中学校の利用は横ばいとなっている。

大阪府内の各教育委員会や大阪市教育センターとの連携事業として、「教員のための博物館の日」を歴史博物館(8 月 1 日)、自然史博物館(8 月 8 日)で実施し、合計 172 名の教員の参加を得た。学校向けの事業を紹介するほか、講演会、学芸員による解説ツアーなどのプログラムを組み込んだ。今回は、幼稚園・保育園などの利用を考慮したプログラムも用意し

た。各館が学校との連携を進めるためには継続性が必要であることから、平成31年度も歴史博物館、自然史博物館で開催する予定である。このほか、歴史博物館と自然史博物館では、大阪市教育センターと共に「大阪市教員研修」を実施している。

美術館と連携した取り組みとしては、特別展「ルーヴル美術館展」の開催期間中にコレクション展で小学校鑑賞学習を実施した。

各館においては、中学・高校の職場体験・職業講話の受け入れも実施しており、歴史博物館では12校60人以上、自然史博物館では大阪府内の8校13人を受け入れた。

## (2) 高等学校・大学との連携

大学との連携については、引き続き大阪市立大学との包括連携協定に基づいて、学芸員養成課程の博物館学3講座（前期：博物館経営論・博物館資料保存論、後期：博物館展示論）への学芸員の出講をはじめ、博学連携講座「幕末維新の変革と大坂（大阪）」（市立大学文化交流センター、11月、4回）、講演会「生き残れ！植物たちの多様な繁殖戦略」（歴史博物館、11月）、ミュージアム連続講座「形を写す、姿を描く」（難波市民学習センター、11月、4回）を共催し、学芸員の派遣や大学教員の招聘を行った。

包括連携協定の枠組みで共同企画したシンポジウムとして「豊臣大坂城研究の最前線」（歴史博物館、12月）を開催し、豊臣関連企画の第3弾として多数の参加者を得た。

キャンパスメンバーズ制度は、公益財団法人大阪科学振興協会、大阪城パークマネジメント株式会社に加え、新たに大阪市立住まいのミュージアム（大阪くらしの今昔館）を管理する大阪市住宅供給公社・アクティオ共同事業体が参加し、4法人・7施設で運営する体制となった。加盟校は3大学3高校となり、29年度より増加した。

各館では、大学の学芸員養成課程等の受け入れを実施しており、大阪歴史博物館では博物館実習に10大学44人、見学実習に189人、自然史博物館では博物館実習31大学54名、美術館では博物館実習に26大学64名、東洋陶磁美術館では見学実習に4大学87名を受け入れた。

## (3) 博物館・その他機関との連携

ミュージアム連続講座2018「形を写す、姿を描く」（11月1日、8日、15日、22日）を大阪市立難波市民学習センターで開催した。従来の市立大学、大阪教育文化振興財団に加え、ミュージアム活性化委員会（文化庁補助金にかかる組織）とも連携し、共催事業として開催した。肖像美術に特化した「ルーヴル美術館展」にちなんだテーマを設定し、歴史博物館、自然史博物館、美術館、東洋陶磁美術館、大阪文化財研究所、および市立大学から6名の講師が講演し、これに加えて大阪大学・岡田裕成教授に特別講演を依頼して、多様な視点からの話題が好評を得た。

歴史博物館では、同志社女子大学と共に「日本の食文化ーその交流のあゆみと現在ー」や歴史学入門講座実行委員会と共同で行った「歴史学入門講座」など連携事業に取り組んだ。

自然史博物館では、特別展「きのこ！キノコ！木の子！」のミニ展示を、市立図書館と連

携し、市立中央図書館をはじめとする市内各図書館 12 カ所で巡回開催し、府立中央図書館でも実施した（4 月～10 月）。また、認定 NPO 大阪自然史センターとの連携により、博物館事業の充実にも努めた。

美術館では、うえまちコンサート「真夏の夜に咲く弦楽の調べ in 大阪市立美術館」を NPO 法人まち・すまいづくりと共催して 8 月 5 日に実施した。

東洋陶磁美術館では、大阪市中央公会堂、大阪府立中之島図書館、国立国際美術館、大阪国際会議場などと連携して、水都大阪、中之島まつり、光のルネサンスなど中之島地域の活性化イベントに協力した。

文化財研究所では、市民団体と協働して「なにわの宮リレーウォーク」第 8 弹を開催した。

また、平野区役所や同区の市民団体と実行委員会を組織して第 16 回「古代市」を実施し、中央区民祭では難波宮調査事務所の展示室公開と展示解説を行った。

## 5. 点検評価

平成 26 年度に、24 年度の総合評価後の各館・研究所における措置状況を報告し、改めて外部評価委員より各館・研究所における現状と今後について多岐にわたる指摘や助言を受けた。28 年度は、26 年度評価の指摘事項に対する 26～28 年度 3 か年の措置状況をまとめる準備作業に着手し、大阪市が策定した「ミュージアムビジョン」や「博物館施設の地方独立行政法人化に向けた基本プラン（案）」を視野に入れながら、29 年度には外部評価委員への説明、および学芸ワーキングによる課題整理を行った。それをうけて、30 年度は地方独立行政法人化にともなう諸規程の整備等において整理された課題等を反映するように努めた。

## 6. 外部資金の獲得

研究活動を推進するうえで代表的な外部資金である科学研修費については、平成 30 年度は協会全体で 26 件が採択され、42,336,658 円の助成を受けた。主な研究課題には、「古墳時代における都市化の実証的比較研究」「渡来文化の故地についての基礎的研究」「博物館をコアとした外来生物の市民調査、その生物多様性理解の促進効果の評価」「中国の王朝交替期における絵画動向をめぐって」「中国宋代天目茶碗の総合的調査研究」などがある。なお、地方独立行政法人化に伴い、研究機関としての指定の切り替えについて文部科学省の指導を受けながら進めた。

また、他の外部資金の獲得にも努め、展覧会や調査研究の充実をはかっている。

文化庁補助金では、平成 30 年度は新たに立ち上げられた「地域と共に創出した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」について、大阪歴史博物館を中核館として、協会が運営する各館に加え、中之島美術館準備室、科学館、大阪観光局、大阪国際交流センターを加えた実行委員会体制で「ミュージアムと地域を活性化させる魅力発信事業」に取り組んだ。31 年度に向けては、同補助金の 2 年目の応募を行っている。

### 3 大阪文化財研究所事業

平成30年度の主な発掘調査として、難波宮跡、中之島蔵屋敷跡等があり、一部をWebサイトや新聞等で公表した。報告書は『大深町遺跡発掘調査報告』を始めとする合計5冊を刊行した。保存科学ではロシアからの研修依頼を受ける等国内外の評価が広がっている。これらの成果を大阪歴史博物館の展示や市民団体との連携による教育普及事業で活用し、大阪の歴史と文化財の周知を心掛けた。

平成26・27年度に大きく減少した大阪市域における文化財調査の事業量は、それ以降は回復傾向にあって大きな変動はなかった。一方、平成31年度以降における市域の埋蔵文化財保護行政と当財団（旧大阪文化財研究所）業務の検討が続く状況で、退職による学芸員数の減少に対応するため、非常勤契約職員を採用して人員の確保と収支の安定を図った。

#### 1. 埋蔵文化財の調査及び報告書作成等

##### (1) 文化財調査受託事業（〔 〕は昨年度、個別の事業は一覧表参照）

平成30年度の発掘調査は契約件数105〔118〕件、調査面積約11,425.5〔17,435〕m<sup>2</sup>、受託額300,822,000〔281,845,000〕円（税抜）であった。前年比で受託件数は90%、面積は65%、金額は107%であった。発掘調査に報告書作成の2,083,000〔49,108,400〕円を合わせた金額は3億300万円弱〔3億3,100万円弱〕で、前年をやや下回った。委託元の内訳は、国関係0.0〔9.3〕%、大阪府0.7〔10.4〕%、大阪市23.9〔29.9〕%、民間75.4〔50.4〕%であった。

発掘調査では（仮称）新美術館（大阪中之島美術館）建設工事（中之島蔵屋敷跡NX18-1）に伴う公共事業1件があり、その他は民間事業であった。また、報告書作成事業は大阪府警察による公共事業1件であった。

105件の契約のうち本年度に発掘調査したのは62件で、そのうち大規模開発等に対応した市教育委員会による試掘結果を受けた発掘調査は13〔19〕件で、新発見の遺跡として市域における遺跡範囲の拡大につながった。

報告書は5〔6〕冊を刊行した。大阪府警察による『中津3丁目所在遺跡B地点発掘調査報告』のほかは、民間開発に伴うもので、近世梅田墓の調査成果をまとめた『大深町遺跡発掘調査報告』、松江藩・今治藩・津山藩の蔵屋敷として変遷した様相を明らかにした『中之島蔵屋

	発掘調査受託事業				報告書作成受託事業		合計		
	件数	面積	受託額（税抜）	件数	受託額（税抜）				
国関係	0	0	0	0.0%	0	0	0%	0	0.0%
大阪府	0	0	0	0.0%	1	2,083,000	100%	2,083,000	0.7%
大阪市	1	1,565	72,495,000	24.1%	0	0	0%	72,495,000	23.9%
民間	104	9,860.5	228,327,000	75.9%	0	0	0%	228,327,000	75.4%
合計	105	11,425.5	300,822,000	100.0%	1	2,083,000	100%	302,905,000	100.0%

敷跡発掘調査報告』Ⅲ、難波京の条坊に合致する中世溝や近世土採穴を発見した『上本町遺跡発掘調査報告』VI、本願寺期から豊臣期の大坂城北側惣構への変遷を明らかにした『大坂城跡』ⅩⅨである。

一方で、報告書作成が未契約である市営住宅建替えに伴う発掘調査22件については、平成28年度から中断したままであった。今後も報告書を刊行して成果を公表することが必要である。

おもな調査成果には次のものがある。

弥生時代では東住吉区桑津遺跡で中期の竪穴建物や土壙多数 (KW18-1) を、阿倍野区阿倍野筋遺跡で中期の土器棺 (AS18-1) を発見した。古墳時代では旭区高殿7丁目で中期の遺物多数を湿地性堆積層から発見し、近くに集落の存在が想定された。住吉区遠里小野遺跡では古代の早い段階の掘立柱建物 (YM18-1) を発見した。難波宮跡では飛鳥時代の宮域南限にあたる位置で掘立柱列 (NW18-1) を確認し、ホームページや新聞等で公表した(平成30年8月28日)。また、大阪城跡の中央区船越町では掘立柱建物 (OS18-2) を発見した。

中世では、淀川区宮原遺跡で荘園に係る12世紀後半～13世紀前葉の井戸数基 (MH18-1) を、熊野街道に近い阿倍野筋遺跡では掘立柱建物 (AS18-1) を発見した。

近世では、大坂城跡の中央区徳井町で豊臣後期の建物跡 (OS18-1) を、大坂城下町跡の中央区今橋2丁目で基礎を瓦で固めた豊臣期の掘立柱建物 (OJ17-14) を確認し、(仮称) 新美術館(大阪中之島美術館)建設用地である北区中之島蔵屋敷跡 (NX18-1) では、広島藩大坂蔵屋敷の船入構築前の堀状遺構や、蔵屋敷建設前の畠跡等を調査した。また、周知の遺跡の範囲外にあたる都島区網島町では、本願寺期から豊臣期の遺構・遺物 (AG18-1) を発見し、豊臣前期に構築された新発見の堤と慶長・伏見地震の関係も確認された。近世の産業に関しては、天王寺区生玉町で18世紀後半以降と考えられる地山を掘削した大規模な土壙を検出し、絵図に現れない瓦土採場と推測された。

これらの成果は報告書のほか文化財情報誌『葦火』でも一般に紹介している。

また、他都市からの遺物整理等の受託は2件、5,981,750円を実施した。

## (2) 保存処理・分析事業

今年度の受託は昨年度と同件数であった。大阪府下では八尾市の5件、奈良県下では田原本町の1件、和歌山県下では和歌山市の1件、そのほか島根県教育庁・松江市・今治市・公益財団法人高知県文化財団・公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター・大野城市・琉球大学等、合計16組織30〔30〕件の事業を受託した。以上の保存処理事業の受託額は約1,749万〔約1,882万〕円(税抜)である。

## (3) 文化財関連施設の管理事業

大阪市立埋蔵文化財収蔵倉庫(平野区)・東淀川調査事務所(東淀川区)・西淀川収蔵倉庫(西淀川区)・鶴浜収蔵庫(大正区)で恒常的な出土遺物の管理を行い、649〔1,368〕箱の遺物収納コンテナの移動や、整理作業による収蔵遺物の系統的な管理を行った。

## 2. 保存科学技術の開発と文化財等資料への応用

大阪市内遺跡では、大坂城下町跡、高殿遺跡をはじめとする50点以上の出土遺物を保存処理した。さらに、大阪歴史博物館の特集展示「発掘された古代・中世の住吉」に出展するため、住吉行宮跡出土の木製品も保存処理した。

科学研究費助成を得て研究を進めているトレハロースを用いた木製文化財の保存技術について、その成果の発表や技術移転、技術開発を積極的に行った。日本文化財科学会（奈良女子大学）での研究発表や、トレハロース含浸処理法研究会（新潟県埋蔵文化財センター）を開催した。モンゴルやタイでの技術移転についても継続している。4月にはロシア・エルミタージュ美術館からの依頼を受けて、同館保存科学担当者に1ヶ月にわたる研修を実施した。10月には中国からの招聘を受け、トレハロース法に関する招待講演を行った。

## 3. 文化財に関する研究

科学研究費助成事業の基盤研究(B)補助金1件・(C)基金3件の研究代表と、基盤研究(A)補助金・(B)補助金 の研究分担者各1件を執行した（他機関への配分を含む交付総額：8,098,474円、うち前年度繰越金480,174円）。前項で述べた保存科学以外の研究成果は、次をはじめとする講演会の開催や海外での学会発表等で公開した。

なお、協会総務部とともに文部科学省と協議し、(一財)大阪市文化財協会として平成31年度以降も文部科学大臣による研究機関に指定され、科研費の応募、執行を継続している。

### ①南代表『古墳時代における都市化の実証的比較研究』

- ・平成30年7月14・10月13日：研究会「古環境復元の最新成果と都市化の諸要素」・「中国における都市の誕生」（於：大阪歴史博物館）
- ・平成30年12月22・23日：総括シンポジウム「古墳時代における都市化の実証的比較研究 - 大阪上町台地・博多湾岸・奈良盆地」（於：大阪歴史博物館）

### ②岡村代表『日欧比較研究による「持続可能な考古学」の構築と国際発信』

- ・平成30年9月3日～11日：「災害考古学」（於：バルセロナ「欧洲考古学者協会（EAA）」）
- ・平成30年10月9日～14日：発表（於：トルコ「考古学・歴史の博物館・コレクション国際委員会（ICOM-ICMAH）」）
- ・平成31年2月23日：講演会「ナタン・シュランガー（仏国立古文書大学教授 欧州考古学の現状と課題）（於：奈良文化財研究所）

### ③大庭代表『先史・古代の河内平野南部地域の古地理復元を通じたジオアーケオロジーの実践研究』

- ・平成30年10月20・21日：ポスター発表「河内平野南部における弥生時代～古代の古地形復元」（於：日本考古学協会2018年度静岡大会）

そのほか『研究紀要』第20号を刊行して全国約300機関に配布し、各自の研究成果の公開に努めた。

#### 4. 教育・普及事業

退職による学芸員減により、本年度も必要な人員を充てることは難しかったが、大阪市教育委員会からも講師担当の協力を受け、従来の事業の継続に可能な限り努めた。

##### (1) 展示等をはじめとする資料活用

大阪歴史博物館と共に開催の特集展示「新発見！なにわの考古学2018」（平成30年10月31日～平成31年1月21日）を開催した。本展では、平成29年度を中心とした発掘成果から、平野区喜連西遺跡の弥生時代中期の土器、中央区大坂城下町跡の江戸時代朝鮮半島の磁器、北区大深町遺跡の近世梅田墓で見つかった副葬品等、約300点を公開した。また、特別展「はにわ大行進」（平成31年1月26日～3月17日）では長原遺跡の埴輪や玉作り資料等の出土遺物を展示した。

このほか、「古代のクラフト展」（5月3日～5月9日）を大阪市立クラフトパークで開催して長原遺跡の古墳時代朝鮮半島系資料を展示した。また、市内各地の公共・民間施設に設置された「街角ミュージアム」は民間施設1件から撤収したため、33箇所2,053点の出土遺物展示となった。

さらに、全国の博物館・美術館等の依頼に対応した出土品は6〔18〕件54〔98〕点、出版目的等で提供した写真・図面は47〔57〕件129〔164〕点、調査研究への対応は14〔9〕件384〔1,207〕点であった。

##### (2) 講座等による教育普及や人材育成

平成30年度も発掘調査の現地説明会は開催されなかった。講座・講演会では「金曜歴史講座（8月31日・9月7日・10月5日・10月12日・10月19日：計707人）」および「大阪の歴史を掘る講演会（市教委から講師、11月25日：98人）」、「なにわの日講演会（7月29日：79人）」、「発掘45周年 長原古墳群と長原遺跡（2月23日：242人）」を大阪歴史博物館と共に開催した。

また、NPO法人大阪ユネスコ協会「大阪の始まりを知る」や平野区画整理記念会館「平野住民大学講座」等他団体が主催する講座の企画や講師派遣を行ったほか、考古学や文化財の研修・教育課程の講師として調査機関・大学等に学芸員を派遣した。国外では中華人民共和国・揚州博物館『楚・漢王朝の漆の保存と研究に関するシンポジウム』（10月25日～27日）に招聘され、当協会のトレハロース法による保存科学の研究成果を公表した。

##### (3) 地域と連携したイベント等の共催・出張展示

本年度も市民団体に協力し、平成23年度から継続している「なにわの宮リレーウォーク第8弾」で文化財探訪イベントを行った。また、平野区役所および同区の市民団体とともに実行委員会を組織する第16回「古代市」で「古代のクラフト展」の展示解説を、中央区民祭りでは難波宮調査事務所の展示室公開と解説を行った。

##### (4) 体験活動事業

本年度も史跡整備のための難波宮跡の発掘調査が実施されなかったため、体験発掘は行っていない。史跡難波宮跡や難波宮調査事務所の資料展示室見学で39〔54〕件177〔330〕人に対応した。そのうち学校を対象としたものは市内小学生、府下高校生徒等4〔7〕件81〔117〕

人であった。そのほか、府立生野聴覚支援学校による細工谷遺跡の発掘調査現場見学（1月11日：50人）を実施した。

#### (5) 情報発信

発掘調査や出土品に係る新聞報道は1回で、文化財情報誌『葦火』は5号（189～193号）各700部を刊行した。定期購読者は96[106]人であった。ホームページの接続は23,802[26,766]件（累計772,904件）であった。またSNS活用の一環としてFaceBookに各種イベントや刊行物の案内を掲載した。

そのほか5ヶ国語（日・英・中簡・中繁・韓）による遺跡案内パンフレット『大坂城跡—豊臣秀吉が築いた天下無双の城—』を刊行し、大阪歴史博物館の協力を得て配布している。これは、ミュージアム活性化実行委員会による「平成30年度文化庁 地域の美術館・歴史博物館を中心としたクラスター形成事業」の一環である。

#### (6) 関連資料の収集・管理

交換・贈呈による発掘調査報告書・普及図書の受入れ作業を進め、1,960[1,767]冊を追加し、登録図書は92,409[90,449]冊となった。

#### (7) 他団体との連携

10年目となった全国埋蔵文化財法人連絡協議会の近畿ブロック（12団体）による「関西考古学の日2018」に参画し、講演会『いのり かなえ たまえ—宗教考古学事始—』（10月14日：約200人）（会場：京都市）の開催、リーフレットによる共同広報、スタンプラリー等を実施して各団体の遺跡情報や教育普及事業の周知に努めた。

### 5. 博物館・美術館との連携

発掘調査の出土品と研究成果を活用し、特に大阪歴史博物館との特別展・特集展示や関連行事の開催で連携した。そのほか「ミュージアム連続講座2018」等の事業でも連携した。

## 4 大阪歴史博物館管理運営事業

平成 30 年度の展示観覧者・利用者数は 430,626 名 [441,870 名、昨年度比 97.5%]（以下、[] は昨年度）とほぼ前年度並みであったが、インバウンドの動向としては、常設展示入館者全体に占める外国人の数は概数で 95,700 人 [111,700 人]（全体に占める割合は 34.9% [36.0%]、有料入館者に占める割合は 50.9% [49.5%]）と減少に転じた。これは主として地震・台風の影響による韓国からの来館者の落ち込みによるものであるが、逆に中国語圏、英語圏の観覧者は増えていることから、エントランス周りにピクトグラムを用いた電照表示やデジタルサイネージを導入し、国内外を問わず来館者の利便性向上とわかりやすい情報提供に努めた。

また平成 30 年度は指定管理での運営の最終年度にあたり、館として可能な限りの施設改修を進め、館内のセキュリティシステム、情報システムの改修、常設展示の修理などを実施し、独立行政法人への運営移行に備えた。

### 1. 資料の収集、保管事業

平成 30 年度は寄贈資料に関しては、資料収集方針にもとづき、鍔を中心とする刀装具コレクションの一括寄贈や「松竹梅に亀鶴図袱紗 森周峰筆」など、歴史資料 162 点、美術資料 957 点、芸能資料 8 点、建築資料 3 点、合計 1,130 点 [4,719 点] を整理・燻蒸し、収蔵した。この結果、当館で保管する館蔵品は 144,444 点 [143,314 点] となった。また、新たに 269 点の寄託資料を受け入れ 4 点を返却し、寄託品のうち 40 点が館蔵品として寄贈された。その結果、寄託資料の総点数は 17,979 点 [17,754 点] となった。このほか館蔵資料 46 点に修復を施した。

### 2. 展示事業

#### (1) 常設展示

常設展示「都市おおさかの歩み」では、季節や時期、話題性を考慮して館蔵品・寄託品を活用した実物資料の展示更新に積極的に取り組み、年間 47 回の展示替えを実施した。古代フロアでは特別展「はにわ大行進」に先駆けて、長原古墳群の出土資料を展示したほか、近世フロアでは季節に即した画題の絵画の展示を、近現代フロアでは陶磁器や染織品を中心に、近年寄贈された資料の展示を実施した。

本年度の常設展の入場者は前年度比 11.4% 減の 274,568 人 [309,846 人] となった。展示解説は、土曜・日曜・祝祭日に実施し、1,111 人 [1,142 人] の参加を得た。

#### (2) 特集展示

特集展示室では、大阪市内の最新の発掘成果を紹介した「新発見！なにわの考古学 2018」といった定番の企画のほか、特別展「西郷どん」に連動した「天保の光と影」を開催した。このほか、「大阪を襲った淀川大洪水」、「発掘された古代・中世の住吉」、「森の宮遺跡と河内地方の縄文土器」、「なにわ人物誌 三好木屑」のあわせて 6 本の特集展示を開催し、常設展示とは

違う角度から大阪の歴史・文化の発信に努めた。

### (3) 特別展示・特別企画展

平成30年度は、特別展として学芸員の自主企画2本、学芸員が企画にも加わる巡回展1本を開催し、特別企画展として自主企画の展示1本を開催した。

#### ◎特別企画展「なにわ人物誌 堀田龍之助—幕末・近代の大坂に生きた博物家—」

(平成30年4月25日(水)～6月18日(月) 開催日数48日間)

大阪歴史博物館が所蔵する堀田家旧蔵資料を中心に展示し、市井に生きた博物家・堀田龍之助の足跡を辿った。自然史博物館にも収蔵される堀田家資料や関連資料も展示し、これまで十分に活用できていなかった館蔵資料を再整理、再評価するという成果を得た。

#### ◎明治維新150年 NHK大河ドラマ特別展「西郷どん」

(平成30年7月28日(土)～9月17日(月・祝) 開催日数46日間 巡回展)

薩摩藩を中心とした幕末・明治維新の動向にからめて、ドラマの主人公、西郷隆盛の生涯を紹介した。その面影をもっともよく表現していると評価される肖像画をはじめ、西郷とともに人物やその時代に関わる資料などを公開し、多くの关心を集めめた。

#### ◎特別展「100周年記念 大阪の米騒動と方面委員の誕生」

(平成30年10月3日(水)～12月3日(月) 開催日数54日間)

米騒動発生と方面委員制度創設から100年にあたり、米騒動以前からの社会事業施設の活動、大阪での米騒動の発生から収束までの過程、創設期方面委員による活動の実態について公文書や方面委員の遺品などの紹介で明らかにし、学術的に各方面から高い評価を得た。

#### ◎特別展「はにわ大行進—長原古墳群と長原遺跡—」

(平成31年1月26日(土)～3月17日(日) 開催日数44日間)

大阪市の南部の大複合遺跡である長原遺跡について、200基を超す長原古墳群や、多彩なモノ作りを行った集落(居住域)のようすを、墓葬・生活・生産に注目し紹介した。長原古墳群を特徴づける形象埴輪や円筒埴輪、重要文化財の船形埴輪などを一堂に展示し、注目された。

平成30年度特別展の観覧者は合計87,176人[58,770人]で、昨年度比約148%だった。

## 3. 調査・研究事業

難波宮と大阪学の研究を2本柱とし、「近年の発掘成果を基にした難波宮造営前後の都市的様相に関する研究」、「近代大阪の茶の湯工芸に関する研究」、「中村順平の設計活動と建築教育に関する研究」、の3課題の共同研究を実施した。また基礎研究としては、「朝鮮・琉球使節に対する川御座船提供の比較史的研究」、「勝矢コレクションの基礎的研究」、「大阪と江戸・東京との都市比較史研究」の3課題を実施した。研究成果については「研究紀要」で発表するとともに、「なにわ歴博講座」などをとおして市民に還元した。また前年度に終了した「鴻池家旧蔵名物裂についての研究」の成果を『共同研究報告書13』として刊行した。

外部資金による研究では、科学研究費補助金 300 万円 [280 万円] を獲得し、基盤研究(B)1 本、基盤研究(C)4 本を行ったほか、出版助成を 1 件受け論文集の刊行を実施した。

#### 4. 教育・普及事業、学習支援

教育普及事業は、市民の歴史学習を支援するためのものとして、学芸員による「なにわ歴博講座」のほか、「古文書講座」や 7 世紀の史料を読む「漢文講座」、「館長講演会」、「考古学入門講座なにわ考古学散歩」、「なにわ歴博寄席」、「日本刀を支える職人の世界」など多彩なメニューを実施し、時宜を得た話題や最新の研究状況を取りあげることで市民の学習意欲に応えた。また常設展示や特集展示、特別展においても、展示解説のほか、関連の内容でトークイベント・講演会・映画会など多くの行事やイベントを開催し、遺跡ガイドツアーも通年で実施した。これらの事業は合計 2,056 回 [2,085 回] を実施し、総計 26,301 人 [23,419 人] の参加者があった。

小・中学生を対象とした「わくわく子ども教室」では、常設展 8 階で毎月第 2 土曜におこなった「むかしの瓦の拓本体験」に年間 343 人 [298 人] の参加者があった。7 月に 3 日間開催した「考古学体験教室」には、延べ 75 人 [27 人] の参加があった。季節に合わせた企画である夏の「綿くり・糸つむぎ体験」には 1 日間で 93 人 [77 人]、正月の「凧づくりと凧あげ」には 21 人 [31 人] の参加者を得た。毎月 2 回、1 階のエントランスでおこなう「手作りおもちゃで遊ぼう」はおもちゃ作りサポーターによる協力のもと 23 回実施し、1,728 人 [1,560 人] の参加者があった。また、夏休みクラフト教室「ダンボールでつくる「夏休みジオラマ・クラフト体験」」には 2 日間で 19 人 [20 人] が参加した。

ボランティア事業は、市民参加型博物館をめざす事業の一環として開館時から導入しているもので、今年度は 224 人が登録し、活動は、難波宮の遺跡をめぐるガイドツアー、常設展示での子どもスタンプラリー、古代衣装・江戸時代の両替商体験・明治の双六遊びなど 7 種のハンズオン、8 階の「歴史を掘る」コーナーでの考古学の体験学習を実施した。さらに 5 月と 11 月の連休に開催した「iPad で楽しむ難波宮遺跡探訪」「石組水路の一般公開」への協力もおこなった。ボランティアの活動は休館日と研修日を除き年間 306 日で、延べ 6,306 人 [4,349 人] が活動した。なお、ボランティア活動の充実と来館者対応の向上を目的に、7 月から 3 月にかけて研修会、特別展関連の見学会、懇談会などを年間 5 回実施した。これに加えて、昨年度は文化庁補助事業の一環として実施した異文化理解の研修を、今年度は自主事業として 2 回行った。また、30 年度活動のボランティアの任期は平成 31 年 3 月末までであったため、次年度以降の継続意思を確認し、210 人を 31 年度の登録者とした。

学習支援関連では、司書・学芸員が常駐する 2 階の学習情報センター「なにわ歴史塾」で、自由に閲覧できる映像ソフト約 100 本、図書約 6,000 冊、「昔の大坂」写真ライブラリー画像約 7,000 点を中心に、館内外から検索できる書庫内図書約 15 万冊も活用しながら、大阪の歴史や文化に関する市民の学習相談に応じた。さらに季節・時宜に応じた特集図書コーナーを年間 6 回設置・配架し、図書利用の推進に取り組んだ。

また、公的施設・機関等からの講師依頼については、可能な限り当館を会場としながらそ

の要請に応えた。

## 5. 学校・市民等との連携

学校連携としては、教員研修、中学生・高校生等の職場体験・職業講話、小学校高学年の考古学体験のほか、大学生からの博物館実習の受入れを行った。

教員等の研修は、前年度は台風のため中止となった「大阪市教員研修」（大阪市教育センターとの共催）を8月1日に開催し、53名の教員・教育関係者の参加があった。参加校園の内訳は小学校37校、中学校14校、高等学校1校、日本語学校1校であった。

中・高校生等の職場体験・職業講話は、12校60人超〔11校90人超〕を受け入れたほか、修学旅行等で当館を訪れる小中学生グループからの学習相談にも応じた。また、大阪文化財研究所と連携して「考古学体験教室」を開催し、11月に市内の小学校9校、464人の児童を受け入れた。大学生の博物館実習は8月後半から9月初めに延べ10日間で10大学44人〔10大学50人〕を、博物館見学実習については189人〔158人〕を受け入れた。なお小中学校による団体利用は、小学校373校〔410校〕、中学校171校〔174校〕、そのうち大阪市立の小学校208校〔210校〕、中学校60校〔62校〕である。前年度と比較すると、市外の小学校の減少が目立ち、市内の小学校は微減、中学校は全体、市内ともに微減という結果になった。

市民や他団体との連携では、学生有志による歴史学入門講座実行委員会と「歴史学入門講座」を開催したほか、関西アジア史談話会と発足記念講演会「古代における「倭と漢」」、江戸遺跡研究会・関西近世考古学研究会・近世陶磁研究会と「近世考古学の提唱」50周年記念研究大会、総合地球環境学研究所と第26回地球研地域連携セミナー、斎宮歴史博物館と連携公開講座「斎宮跡と難波宮」、民営化したOsaka Metroと「笑都大阪 落語・講演会」を共催した。

## 6. 情報発信、広報宣伝

情報発信、広報宣伝については館事業を広く周知し、館利用者の増を目的として積極的に取り組んだ。館の存在の周知を徹底する目的から、地下鉄車内における案内放送を通年で実施とともに、英文年間行事予定表の作成と英語による特別展概要・主要作品紹介をホームページに掲載することで、外国人向けの情報提供をおこなった。インターネット関係では、ホームページに展示・普及事業にかかる案内をすべて掲載し、年間で437,991件〔448,981件〕、1日平均1,200件と昨年度並みのアクセスを得た。また「携帯サイト」の随時更新、ツイッター・「なにわ歴史塾ブログ」による新着情報の発信を積極的に実施した。ツイッターは平成30年度末でフォロワー数が3,960、年間ツイート数は667件であった。なにわ歴博カレンダー（4回各2万部）や行事ごとの案内チラシなどの紙媒体の発行も継続し、また常設展示、特別展の広告を雑誌・新聞等の情報誌に掲載し、多様な層への情報浸透に引き続き取り組んだ。

## 7. 来館者サービスの向上

館のエントランス周辺の案内表示等の改善をはかるため、ピクトグラムを用いた内照式サイン

や大型のデジタルサイネージ等を導入、見やすく、わかりやすい案内を目指した。

館内のレストランとの連携をはかり、特別展ごとに観覧者への入館割引または飲食割引のサービスを実施している。大阪城天守閣とのセット入場券(常設のみ)は、両館で平成30年度38,030枚、前年度比78.5%（累計231,061枚）という販売実績となっている。平成22年度の発売開始から毎年売上枚数が増加していたが、地震、台風の影響もあり、平成30年度は減少に転じた。セット入場券の購入者に特典として配布している大阪城公園周辺マップ（日・英・中簡・中繁・韓の5言語）を継続発行し、地域連携のネットワークを使った広告掲載の募集も行った。

また、ゴールデンウィーク中の5月1日、お盆期間中の8月14日に、来館者の利用促進のため臨時開館を行った。

## 8. 施設の維持管理

建物設備の維持保全のため空調をはじめとする電気、機械設備などの機器・装置の日常点検のほか、定期メンテナンス、法定点検などを実施し良好な施設設備の維持に努めた。

また経年劣化等による機器の不具合に対応し、入退室管理装置の更新、第1研修室の音響・映像システムの改修、受付窓口券売機システムの更新、収蔵庫ガスケット等の交換、レストラン厨房ダクト簡易消火装置の更新などを実施した。展示室関連では、展示情報システムの改修、常設展示室のプロジェクター・モニター・アンプ・再生機の交換、7階常設展示場実寸大人形衣裳の交換、10階展示場スライディングウォールの部品交換・修理を実施した。また、来館者サービス向上として、大型デジタルサイネージ等各種サインの設置を図った。

## 9. 友の会 その他独自事業

友の会は、幹事会を中心とする会員による自主運営に移行して5年目を迎えた。事業としては講座「仏教伝来と難波堀江」、見学会「馬見古墳群を歩く」・「南朝ゆかりの史跡をめぐる」（2回）、特別展解説会（2回）など多彩な企画が計10回開催され、のべ338人の参加者があった。当館は、事業の企画立案や講師の派遣などをとおして友の会の活動支援を行った。平成30年度の会員数は247名（家族会員を含む）であった。

その他、独自の事業として、ジュンク堂書店大阪本店で、展示図録等の常備販売を実施した。

## 10. 文化庁補助金事業

平成30年度に新たに採択された、文化庁「地域と共に創した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」（5ヵ年）において、大阪市博物館施設の国際発信強化実行委員会に中核館として参画した。初年度にあたる30年度、当館においては「地域の魅力再発見・再活用・再発信」の一環として「大阪関連資料の掘り起し」を目的に、①資料の借用・運搬、②資料の撮影を行い、一部を特別展「100周年記念 大阪の米騒動と方面委員の誕生」において一般公開したほか、関係資料の撮影を行った。

## 5 大阪市立自然史博物館管理運営事業

平成 30 年度は特別展を 2 回開催したが、それぞれに特徴ある展覧会となった。

「きのこ！キノコ！木の子！～キノコから眺める自然と暮らし～」展はこれまで当館に蓄積された標本と研究成果をもとに、きのこ研究者の目線を紹介することできのこの魅力を紹介し、興味を持った市民に自らきのこを探求する手法を紹介する特別展となった。

「恐竜の卵」展は、最新の研究成果を元に、卵化石に焦点を当てながら、恐竜の進化、そして恐竜から鳥へのつながりを示すことができ、多数の入館者に見てもらえた。

### 1. 資料の収集、保管事業

動物・植物・昆虫・化石・岩石・鉱物等の資料を、大阪を中心に日本全国、さらに必要に応じて海外からも収集した。収集した標本は低温燐蒸などを実施した後、温度湿度管理が可能な収蔵庫において、資料ごとに最適な環境で保管し、展示・研究活動に活用している。この数年間、新規資料は主として寄贈によって増加している。30 年度に寄贈を受けた主なコレクションは次の通りである。

岐阜県熊石洞産哺乳類化石（666点）、日本各地の海浜砂（98点）、追手門学院高等学校の動物標本・昆虫標本・植物さく葉標本（標本レスキーによる）（8,836点）、クロサイなどの飼育哺乳類・鳥類（天王寺動物園、13点）、八木沼コレクション（クモ）タイプシリーズ（464点）。

平成 30 年度末の総資料数は 177 万 2,231 点（昨年度末比 53,029 点の増加）。

### 2. 展示事業

平成 30 年度の入館者数は、常設展 228,182 人（うち有料 89,833 人）、特別展 77,989 人（うち有料 32,453 人）であった。常設展、特別展を合わせた総入館者数は、306,171 人であった。常設展入館者は前年度比 117.9% で 34,751 人増（有料入館者は 15,907 人増）、一方で特別展を合わせた総入館者数は前年度比 77.6% で 88,295 人減となった。

特別展入館者の減については、29 年度の特別展が年度をまたいで開催を含めて 4 回開催し、総開催日数が 180 日に上ったこと、そのうちの一つが ATC を会場とした大規模恐竜展であったことに比較して、本年度は 2 回の開催で開催日数が 112 日間であることが影響している。一方で常設展入館者数は増加しており、特別展セット券としての有料入館者数・冬期の臨時休館の有無なども勘案すると、昨年度比で 5,000 人程度の純増が見積もられ、インバウンド増加による影響が考えられる。

有料入館者のうち、インバウンド効果は 25,000～30,000 人と推定される。

小中学校の団体見学は全体で 456 校（27 年度 460 校、28 年度 470 校、29 年度 406 校）、うち市内小学校 133 校、市内中学校は 55 校であった。年度による変動があり、昨年度の減少が戻った形となった。

## (1) 常設展示

展示装置の故障については、即時的な補修に努めた。

また引き続き満足度向上をめざして「ジオラボ」・「子どもワークショップ」・「ミニワークショップ（たんけんクイズ）」等の館内行事を実施し、来館者サービスに努めた。

## (2) 特別展

### ①特別展第49回特別展「きのこ！キノコ！木の子！」

<会期> 平成30年7月21日（土）～10月21日（日） 79日間

入場者：25,027名（うち有料 11,193名、44.7%）。

今回の特別展は、主担者が代表となつたいくつかの研究プロジェクトの成果を活用したものとなっている。2011年度から2014年度にかけて行われた科学研究費「アマチュア菌類学のための支援情報基盤と遺伝情報つき地域エキシカータ作成の試み」（JP23300333）、2015年から2019年にかけて行われた「市民が形成した重要菌類資料の研究—市民科学者育成・支援機関としての自然史博物館論」（JP15K01157）の成果として、菌類図譜に関する掘り下げた研究の成果などを用いて展開した。

<展示構成>

1. 台所から始めるきのこ観察
2. きのこから見る自然
3. いろいろなきのこ
4. いろいろな生き物と関わるきのこ
5. きのこをみつめる
6. 標本を活かす・伝える
7. きのこへの目線
8. 学芸員相談コーナー

展示標本は、菌類標本700点、昆虫標本など310点、模型など30点、彩色菌類図譜は同時に200点（展示替えにより、のべ約500点を展示）図鑑など関連資料150点に登った。

### ②特別展「恐竜の卵～恐竜誕生に秘められた謎～」

（読売新聞大阪本社と実行委員会を組織し開催）

<会期> 平成30年3月10日（土）～5月6日（日） 52日間（うち、30年度は33日間）

入場者：78,377人（有料31,993人、40.8%）、無料入場者46,384人。

近年、恐竜の卵や巣の化石は中国大陸を中心に数多く見つかり、様々な恐竜が独自の方法で産卵、子育てをしてきたことが分かつてきた。

本展では、卵による恐竜の誕生をメインテーマに、多様な恐竜コレクションを所蔵する中国の浙江自然博物館から恐竜の卵や巣の化石をはじめ、それらの親や幼体の標本などの実物化石を一堂に展示。さらに、恐竜の産卵の方法、営巣のしかた、抱卵行動の進化、生まれたばかりの

幼体といった、産卵から孵化までの過程などについて、最新研究を踏まえて紹介した。

＜展示構成＞

1. 卵の生物学
2. 卵化石の発掘と研究
3. 恐竜の卵と巣の進化
4. 東アジアの恐竜営巣地

(3) テーマ展示及びミニ展示

① テーマ展示「ツバキ関連図譜～岸川椿蔵書より」

期間：平成 30 年 3 月 31 日(土)～4 月 30 日(月・祝)

場所：本館 2 階 イベントスペース

② テーマ展示「外来種の調査プロジェクト」

期間：平成 30 年 5 月 12 日～6 月 10 日

場所：本館 2 階 イベントスペース

③ ミニ展示「三木茂博士収集メタセコイア化石」

メタセコイアは、1941 年に三木茂博士によって化石として発見され、1945 年に中国で生きている大木が発見され、「生きている化石」と呼ばれ、現在、全国に現生種が植栽されている。自然史博物館では、三木博士の採集された化石や植物の標本を収蔵している。5 月 11 日付けで、「三木博士の収集したメタセコイア化石」457 点が、大阪市の天然記念物に指定された。天然記念物指定を記念して、指定標本の一部を展示した。

期間：平成 30 年 5 月 12 日～6 月 17 日

場所：本館第 2 展示室内

④ ミニ展示「ガシャモク」

期間：平成 30 年 10 月 27 日～11 月 25 日

場所：本館 1 階入口横 展示スペース

⑤ テーマ展示「ジュニア自由研究・標本ギャラリー」

期間：平成 30 年 12 月 15 日～平成 31 年 1 月 27 日

場所：本館 1 階 ナウマンホール

⑥ ミニ展示「亥年展」

期間：平成 31 年 1 月 5 日～2 月 3 日

場所：本館 1 階入口横 展示スペース

2019 年の干支、亥年にちなんで、遺跡から発掘されたイノシシの頭蓋骨を展示したほか、コトヒキ（魚、「猪の子」という地名がある）、ブタノツメ（貝）、イクビチョッキリ（甲虫）、タマチョレイタケ（菌類、漢字で書くと玉猪苓茸）、イノコヅチ（植物）など、イノシシ（あるいはブタ）にちなんだ生き物を展示了。

#### ⑦ミニ展示「新種 クマノザクラ」

期間：平成 31 年 3 月 3 日～4 月 29 日

場所：本館 1 階入口横 展示スペース

館外での展示

#### ⑧大阪府立中央図書館・大阪市立図書館での展示

特別展「きのこ！キノコ！木の子！」の広報および連携事業の一環として、大阪市内の図書館 12 館（東成、生野、東淀川、島之内、淀川、浪速、此花、城東、東住吉、旭、北、中央）および府立図書館において、4 月から 10 月にかけてミニ展示を行った。

### 3. 調査研究事業

調査研究は博物館活動の根幹をなすものであり、学芸員の個別テーマによる研究をはじめ、科研費など外部資金を獲得しての研究、平成 31 年度の特別展開催に向けて市民との協働で進める「大阪を中心とした外来生物の影響プロジェクト調査」、などを実施してきた。それらの成果の一部はテーマ展示やミニ展示でも紹介したほか、館で刊行する研究報告や学会誌で公表するとともに、講演会を通じて市民に普及した。外来研究員も含む論文や著作数は、国際誌 31 件、国内誌 35 件であった。

市民に開かれた研究施設として、外部研究者の受け入れに関する要項により平成 30 年度は 69 名の外来研究員を受け入れた。収蔵標本や研究設備・機器を使って研究成果を公表するとともに、収蔵標本の充実にも寄与している。

30 年度は外部研究資金として文部科学省科学研究費補助金は 2,600 万円（直接経費・間接経費合計）を獲得し、基盤研究 10 件（基盤研究 B2 件、同 C8 件）、若手研究 1 件、研究活動スタート支援 1 件の研究を進めた（外来研究員を含む）。また分担研究者として 3 件（4 名）の研究を実施し、研究費（間接経費を含む）117 万円の配分を受けた。民間ファンドその他では、藤原ナチュラルヒストリー振興財団、水源地生態研究会、屋久島環境文化財団、発酵研究所、カメイ社会教育振興財団による研究助成が採択され、522 万円（繰り越し分含む）の配分を受けた。

### 4. 教育・普及事業

市民が自然をより深く理解するためには、展示を見るだけでなく、野外で実物の自然に触れることが重要である。自然史博物館ではこのような観点から、多様な博物館利用者とその要望に応えるため、各種の普及行事を行っている。これら教育・普及事業の開催は 167 回（中止の 10 回を含む、昨年度は 162 回）、友の会開催の行事が 27 回（中止の 5 回を含む）で合計 194 回（昨年度は 201 回）、参加者総数は 36,526 人（昨年度は 32,450 人）であった（詳細は別紙資料編に掲載）。

また、行事の実施に際しては、自然史博物館のボランティアである補助スタッフの協力を得ている。補助スタッフとして延べ 215 名の方々に協力いただいた。

## 5. 学校・市民等との連携

「総合的な学習の時間」に応用できるテーマで、学校教員や教員を目指す大学生・自然観察会指導者を対象とした「教員・観察会指導者向け支援プログラム」を計画的に実施できた。学校向けには、展示解説や標本など博物館資料の貸出し、学校教育を支援してきた。また8月8日には「教員のための博物館の日」を開催し、参加者数は141名であった。小中学校の団体見学は合計で456校（市内小学校133校、市外小学校211校、市内中学校55校、市外中学校57校）で、昨年度と比べ50校の増加であった。そのうち、学芸員による特別レクチャーは合計23件、貸出学習キットの利用が73件であった。

大学生の博物館実習は、31大学、54名の学生を受け入れた。職場体験学習は、大阪府内の中学校8件（計13人）を受け入れた。

友の会会員を中心に100人以上の市民が参加するプロジェクトA「外来生物の影響調査」を実施中である。「認定NPO大阪自然史センター」との連携により、博物館事業の充実にも努めている。

## 6. 情報発信、広報宣伝

情報発信、広報宣伝については館事業を広く周知し、より多くの市民に博物館を利用してもらうことを目的として取り組んだ。従来型の展示事業・教育普及事業のポスター・チラシを中心とした広報に加えて、研究成果などのプレスリリース、Web・SNSを利用した広報に積極的に取り組んだ。

地下鉄車内ガイド放送（最寄り駅案内）を通年で実施して、通常は常設展の案内、特別展開催時は特別展情報を案内して、地下鉄御堂筋線沿線の利用者に対して広く博物館の存在を周知することができた。特に、夏の特別展「きのこ！キノコ！木の子！」は語感のリズムもあって多くの人の印象に残り、SNSなどで話題に登っていた。

ホームページは、新着情報は48件を発信（台風による臨時休館など一時的なものを除く）するなど、タイムリーで内容豊富な情報発信に努めている。平成30年度のHPアクセス数（トップページ）は約38.8万件で、昨年比0.3万件微増した。HP掲載の新着情報を中心に「Twitter」、「Facebook」を通じて情報提供するなどしている。Twitterの発信数は184件、フォロワー数は平成30年3月31日時点7,986人（前年比866人増）であり、広報媒体として良好に機能していることがうかがえる。Facebookについては、情報がどのくらいの人に到達したかの指標でもある合計リーチ数が、昨年度が32万人だったのに対し、今年度は約30万人と減少している。これは、新着情報の投稿数減少が原因であろう。博物館Facebook単体でのリーチ数は11万に過ぎず、昨年同様シェアなどにより拡散されていることが伺える。また英語版Facebookページを開設し、不定期ながら外国からの来館者向けの情報提供を試みている。

昨年度から特別展の解説用に作成した映像などを動画投稿サイトYouTubeに試行的に掲載しており、昨年度末に撮影した常設展示での学芸員によるギャラリートーク8番組を、英語

字幕付きで YouTube で公開した。展示室に QR コードを設置し、スマートフォンなどで視聴できる。多いものでは 600 回以上再生されている。この他、過去の特別展などで撮影した映像や資料映像も公開しているが「セミの卵の孵化」などは 3 年で 2 万 4 千回視聴されている。

また、きのこ展など特別展の内覧会には、特別展を宣伝協力いただくブロガーを招待し、市民参加型の広報を実施した。

学術リポジトリの公開：当館は研究報告・自然史研究を国立情報学研究所の NiI-NELS を利用して CiNii などに公開してきたが、同事業の停止に伴い JAIRO Cloud を利用したリポジトリシステムを平成 29 年度より運用開始した (<https://omnh.repo.nii.ac.jp/>)。平成 30 年度には近年当館が発行した科学研究費などの報告書、「大阪市立自然史博物館研究報告」、「自然史研究」「大阪市立自然史博物館館報」などの登録をすすめ、新たに 60 件を PDF 公開している。また当館内に事務局において発行をしている学術雑誌「関西自然保護機構会誌」およびその後継誌である「地域自然史と保全」についても目次情報の登録をおこない、合計 1,329 アイテムの情報がリポジトリ経由で発信されている。平成 29 年度の総ダウンロード数は 19,384 件、サイトの閲覧回数は 7,395 回となっている。他の論文検索サイトからの直接ダウンロードリンク引用が多いようだ。

## 7. 来館者サービスの向上

「花と緑と自然の情報センター」には、図書閲覧・情報検索・標本閲覧・ビデオ閲覧のコーナーがあり、学芸員を配置して質問等にも対応し、多くの市民の学習の場になっている。また、本館ミュージアムサービスセンターには総務課スタッフを配置して学校対応や市民サークルへの窓口になった。常設展では、来館者向けイベントの「ジオラボ」「子ども向けワークショップ」「自然史博物館探検クイズ」を実施し、多くの来館者から好評を得ている。

外国人旅行者・外国人居住者に向けた環境整備として、文化庁の平成 29 年度「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」において、大阪市博物館協会が申請、採択された「大阪市博物館施設の国際発信強化事業」により、展示室の 49ヶ所に QR コードパネルが設置され、QR コードを読み取ると、学芸員による解説 (YouTube の映像、英語字幕有り)、展示パネルでは説明されていない詳しい解説や子供向けの解説 (ともに日、英、中 (簡・繁)、韓国語に対応) を見たり読んだりできるようになっている。

## 8. 施設の維持管理

警備・案内・券売・清掃及び設備等の保守点検を外部委託し、安全・快適な施設の維持管理に努めてきた。職員による日常的な安全点検を励行するとともに、職場安全衛生委員会の職場巡回も行っている。防災対策では、隣接の長居パークセンターと協働で震災・防火訓練を実施した。平成 30 年度は収蔵庫用空調設備 (空冷ヒートポンプチラー) の圧縮機等の交換や展示室・事務室系統等の空調設備 (ガス吸収式冷温水発生機) 2 台のオーバーホールを実施した。

また、平成 30 年度に大阪府北部を震源とする地震が発生したことから、当館のナウマンホールの内壁タイルの浮きを調査すると共に、浮きが発見された箇所については補修を行った。

## 9. 友の会

自然史博物館友の会（30 会計年度は 1,669 名（家族単位））は、昭和 30 年に大阪市立自然科学博物館後援会として発足した当初から、博物館と連携しながら市民と博物館をつなぐ役目を果たしてきた。その自然史博物館友の会を母体として平成 13 年には「NPO 大阪自然史センター」が発足し、現在は大阪自然史センターが友の会を運営している。友の会会員向けの観察会などを 22 回開催（のべ 1,878 名が参加）し、学芸員が観察指導を行った。友の会会員は、友の会が主催する行事に参加するだけでなく、博物館が開催する各種の普及教育事業にも積極的に参加し、行事を盛り上げてくれている。また友の会行事は積極的に公開し、一般の人々の参加も可能にしているので、参加者の満足度も高く、友の会への関心を高めることができた。

## 10. ユニークベニュー事業など

### ・ユニークベニュー事業の試行実施

当館では、大阪市が進める MICE 招致に協力し、大阪観光局と共同でユニークベニュー事業を試行実施し、大阪の魅力発信に努めている。平成 30 年度には以下の試行を行った。

10月7日（日）：結婚披露パーティー

### ・展示の魅力向上のために、市民からの寄附金を募集

(1) 大阪市ふるさと寄附金の利用：自然史博物館では新しい姿勢の恐竜（アロサウルス）を展示し、恐竜の魅力やサイエンスを紹介したいと考え、大阪市が進めている「ふるさと寄附金」制度を利用して、多くの市民からの寄附金により、展示を実現できるよう進めている。

## 6 大阪市立美術館管理運営事業

美術館では、展覧会にかかる事業が中心となって全体の事業が展開している。平成 30 年度は、特別展として「江戸の戯画—鳥羽絵から北斎・国芳・暁斎まで」「第 63 回全関西美術展」「ルーヴル美術館展 肖像芸術 — 人は人をどう表現してきたか」「フェルメール展」の 4 本の展覧会を開催した。また所蔵品・寄託品によるコレクション展（平常展）では、特集展示「生誕 150 周年 阿部房次郎と中国書画」をはじめ、それぞれの展示でテーマ設定に工夫をこらし、作品に様々な角度から光をあてるこことによって、多彩な展示を実現させた。こうした展覧会の展示や講演・美術講座の開催などを通じて、市民の情操と知的好奇心を刺激し、学習支援とともに美術に対する関心を高めたことにより、多くの来館者を得ることができた。

一方、展覧会や講演会・講座、論考などのために作品の調査・研究を行い、来館者への情報提供を行った。また、寄贈希望作品や新たな寄託品受入のための調査によって、新たな寄贈作品を受け入れることができた。そして、作品の収集・保管・貸出をはじめ、施設と設備の維持管理にも万全を期してきた。さらに、大阪市が令和 3 年度（2021）着工を目指している大規模な改修に対して、美術館運営の実績等を踏まえ協力してきており、平成 31 年度も引き続き協力・参画をしていく。

### 1. 資料の収集・保管事業

- ・近世日本画 1 件、漆工 2 件、書跡 2 件（合計 5 件）の寄付申出作品に関する評価を行い、経済戦略局に上申して決裁後に台帳登録した。平成 30 年 3 月 31 日での総収蔵品数 8,495 件となった。
- ・寄託作品は 13 件を受入れ、14 件を返戻した。
- ・国内外の美術館・博物館に 123 件（128 点）の作品貸出しを行い、出版社などに作品の写真画像 79 件（81 点）を貸出した。
- ・中収蔵庫の燻蒸作業を実施し、あわせて IPM（総合的有害生物管理）の一環としての防虫・防黴にかかる清掃作業も実施した。

### 2. 展示事業

#### (1) コレクション展

美術館の所蔵する日本、中国等の東アジアの作品を中心としたコレクションのなかから、日常の調査研究の進展や保存状況を考慮したうえで、作品を選定し展示を行っている。

特別展の開催期間に合わせ、22 の主題で展示を行った。

4 月 17 日（火）～5 月 13 日（日） 25 日間

「洋画と日本の風土」「百花繚乱 日本の漆工」「鉄：クロガネの美」

5月 15 日（火）～6月 10 日（日） 24 日間  
「炎をまとう尊像 一明王・天部一」「江戸禅僧の戯画」「翰墨流香 一清時代の書画」

7月 6 日（金）～7月 18 日（水） 7月 31 日（火）～9月 1 日（土） 42 日間  
「古代イタリアの息吹—エトルスク美術」「涼風颯々 夏のやきもの」「赤松麟作」

7月 31 日（火）～9月 1 日（土） 30 日間  
「日本・中国の仏教彫刻」「BIOMBO！—金と墨—」「動物を描く—近世・近代の日本絵画」

9月 22 日（土）～10月 21 日（日） 26 日間  
「人物を描く—美人画と自画像—」「山口謙四郎の眼」「おおさかの仏教美術 I」

10月 16 日（火）～11月 25 日（日） 36 日間  
特集展示「生誕 150 周年 阿部房次郎と中国書画」

11月 27 日（火）～1月 14 日（月・祝） 39 日間  
「めでたづくし—鍋島焼の吉祥文様—」「辻愛造を歩く—昭和風景アンティーク—」「江左の風流—六朝石刻書法—」

2月 16 日（土）～3月 24 日（日） 32 日間  
「啓蟄!地中から美術館へ」「節句を彩る—人形と漆工—」「都市を描く—洛中洛外図と名所図会—」

本年度も、館外の案内看板の一部にコレクション展の案内をのせ、展示室内の解説パネル、題箋・作品解説などにも読みやすいフォントを使うなどの工夫をこらし、見やすさとわかりやすさにつとめた。なお、コレクション展全体の観覧者は 16,192 人(特別展入館者を含む)であった。

## (2) 特別展・特別陳列

学芸員の調査研究の蓄積を基礎に、利用者のニーズを踏まえながら魅力あるテーマを設定し、また全国を巡回する集客性が高く充実した内容の展覧会を誘致して特別展を開催した。

### ①特別展「江戸の戯画—鳥羽絵から北斎・国芳・暁斎まで」

[平成 30 年 4 月 17 日（火）～6 月 10 日（日）]

ゴールデンウィーク期間中臨時開館：5 月 1 日（火）

開催日数：49 日 観覧者数：83,409 人

主催：大阪市立美術館、毎日新聞社・MBS

太平の世が続いた江戸時代には、多くの戯画が描かれた。一口に戯画といっても多種多様なものがあるが、本展では「鳥羽絵」をキーワードに江戸時代の戯画を紹介する。

鳥羽絵は、18 世紀の大坂で鳥羽絵本として出版され、その人気は明治にまで及んだ。また、上方に留まらず、江戸の浮世絵などにも影響を与えている。鳥羽絵を洗練させたとされる大坂の「耳鳥斎（にちょうさい）」はもちろん、鳥羽絵本の影響を受けたと考えられる江戸の「北斎」や「国芳」、そしてその流れをくむ「暁斎」など、時代や地域により変化し

ながらも、笑いの感覚は脈々と受け継がれてきた。

本展では、そのような流れを追いつつ江戸時代の戯画のエッセンスをご覧いただいた。

#### ②特別展「第 64 回全関西美術展」

[平成 30 年 7 月 6 日（金）～7 月 18 日（水）、7/12（木）休館]

臨時開館：7 月 9 日（月）・17 日（火）

開催日数：12 日 観覧者数：5,734 人

主催：大阪市立美術館、読売新聞社

大阪の芸術振興を図るため、昭和 16 年に「大阪市展」として発足した公募展。日本画・洋画・彫刻・工芸・書の 5 部門から構成され、新人作家の登竜門とも呼ばれている。平成 28 年度からは外部有識者を加えた審査方法などの改革と刷新を行い、経営面での改善も図った。応募作品の中から選ばれた入選作品と関西在住の招待作家の作品、あわせて約 900 点を展示し、関西における現代美術の動向の一端を概観した。

#### ③特別展「ルーヴル美術館展 肖像芸術 — 人は人をどう表現してきたか」

[平成 30 年 9 月 22 日（土）～平成 31 年 1 月 14 日（月・祝）、12/28-1/2 休館]

臨時開館：12 月 25 日（火）・1 月 3 日（木）・4 日（金）

開催日数：95 日 観覧者数：257,777 人

主催：大阪市立美術館、読売テレビ、読売新聞社

ルーヴル美術館の全 8 部門—古代オリエント美術、古代エジプト美術、古代ギリシャ・エトルリア・ローマ美術、イスラム美術、絵画、彫刻、美術工芸品、素描・版画—協力のもと、“肖像”に焦点を当てた特別展を開催する。肖像の制作に臨んだ芸術家たちは、どのような素材や手法を用い、どのような表現を生み出してきたのか。

本展では、肖像芸術の役割—モデルとなった人物の存在を記憶・記念する、権力を誇示する、あるいはイメージを拡散するなど—を中心に、ルーヴル美術館の豊かな名品の数々をご覧いただいた。

#### ④特別展「フェルメール展」

[平成 31 年 2 月 16 日（土）～3 月 31 日（日）]（全体は 5 月 12 日まで開催）

開催日数：39 日 観覧者数：222,064 人

主催：大阪市立美術館・産経新聞社・関西テレビ放送

フェルメールはオランダを代表する最も偉大な画家の一人であり、作品の美しさや静謐さは、世界中に知れ渡っている。この度は、一般的に知られている彼の 35 作品のうち、東京・大阪あわせて日本初公開を含む 8 点が来日する。そのほか、オランダ黄金期を代表する画家であるハブリエル・メツー、ピータル・デ・ヤーホ、ヤン・ステンなど世界的にも稀少で非常に評価の高い作品約 40 点を同時に展示している。

### 3. 調査・研究事業

- ・平成 30 年度に開催した、特別展「江戸の戯画—鳥羽絵から北斎・国芳・暁斎まで」「ルーヴル美術館展 肖像芸術 一人は人をどう表現してきたか」「フェルメール展」、特集展示「生誕 150 年 阿部房次郎と中国書画（仮称）」および平成 30 年度の開催を予定している特別展「マリー・エインズワース浮世絵コレクション」「仏像 中国・日本」について、作品情報の調査・研究を実施した。
- ・『大阪市立美術館紀要』19 号を年度末に発行し、当館学芸員による、館蔵品・寄託品に関する論文等 5 本と、展覧会報告等を掲載した。
- ・平成 25 年度に文部科学省による科学研究費対象施設と認められたが、平成 29 年度科学研究費補助事業として引き続き 3 研究を実施した。平成 29-31 年度の助成に「中国の王朝交替期における絵画動向をめぐって—宋代以後の遺民画家の作例を中心に」があり、その研究成果の一端は、特集展示「生誕 150 周年 阿部房次郎と中国書画」において活用された。また平成 30 年度より新規に「礼拝像・祭具制作における素材選択の心性史：材質とその聖性の喧伝に関する調査・研究」および「江戸時代の土佐派の基礎的研究—作画領域の確立と画風の継承から見た土佐派の活動—」が採択され、自主企画展に向け調査を始めている。
- ・平成 30 年度は、公益財団法人花王芸術・科学財団から「阿部房次郎生誕 150 周年『阿部房次郎と中国書画』展」および公益財団法人ポーラ美術振興財団から「国際シンポジウム『阿部コレクションの諸相—文化的意義とその未来』」の助成を受けて、両企画を実現に導いた。公益財団法人出光文化福祉財団より「国内所在作品調査を踏まえた芝山漆器の総合的研究」、メトロポリタン東洋美術センター東洋美術研究振興基金より「近代日本における中国仏教・道教彫刻コレクションの形成に関する研究」の両助成を受けて本館所蔵品の学術的研究を深化させたことは、今後のコレクション展示にとって大変有用であった。

### 4. 教育・普及事業

#### (1)博物館実習

実習生として 26 大学から 64 名の大学生を 6 月 25 日（月）～6 月 29 日（金）の 5 日間受け入れて博物館実習を実施した。特別展「全関西美術展」に関する補助作業の実習、および工芸や書画の作品の取り扱いなどの講義・実習のカリキュラム内容で実施した。

#### (2)記念講演会など（合計 10 回、総参加者数 1,252 人）

- ・特別展「江戸の戯画—鳥羽絵から北斎・国芳・暁斎まで」  
　　講演会 2 回（外部講師 1 回、当館学芸員 1 回） 356 人
- ・特別展「ルーヴル美術館展 肖像芸術 一人は人をどう表現してきたか」  
　　記念講演会 3 回（外部講師 3 回） 409 人  
　　特別講演会 3 回（当館館長 3 回） 260 人

- ・特集展示「生誕 150 周年 阿部房次郎と中国書画」  
国際シンポジウム 1 回 (のべ 2 日)  
(海外講師 1 人、海外発表者 3 人、国内発表者 5 人、当館学芸員 2 人) 227 人
- ・特別展「フェルメール展」  
講演会等(外部講師 2 回、当館館長 8 回) 754 人

- (3) 普及イベント (合計 2 回、総参加者数 1,341 人以上)
- ・特別展「改組 新 第 4 回日展」  
日展作家プレゼント抽選会 5 回 (地元作家提供によるプレゼント抽選会)  
(抽選券配布合計 750 枚)

## 5. 学校・市民等との連携

- (1) 小学校・中学校・支援学校の鑑賞授業 (合計 4 回、総参加者数 300 人)
- ・特別展「江戸の戯画—鳥羽絵から北斎・国芳・暁斎まで」  
小学校 1 回 52 人
  - ・コレクション展  
小学校 1 回 44 人
  - ・特集展示  
小学校 1 回 114 人
  - ・特別展「ルーヴル美術館展 肖像芸術 — 人は人をどう表現してきたか」  
小学校 1 回 90 人
- この内、市立瓜破東小学校 (10 月 10 日) のコレクション展鑑賞授業については、大阪市博物館協会の学校連携として実施した。
- (2) 大学・学術団体との連携 (合計 1 回、総参加者数 227 人)
- ・特集展示「生誕 150 周年 阿部房次郎と中国書画」  
国際シンポジウム「阿部コレクションの諸相—文化的意義とその未来」 227 人
- (3) 障がい者特別鑑賞会  
三菱商事株式会社と連携し、普段なかなか美術館等に行きづらい障がい者の方々がゆっくりと鑑賞できる特別鑑賞会を特別展「フェルメール展」開催時の 2 月 23 日 (土) の閉館後に実施し、157 名の参加を得た。
- (4) なにわの日記念 うえまちコンサート  
美術館の地元、NPO 法人まち・すまいづくりが、浪速区を中心に行っている「なにわの日」のイベントの一環として、8 月 5 日 (土) になにわの日記念うえまちコンサート「真夏の夜に咲く弦楽の調べ in 大阪市立美術館」を開催し、155 名の参加を得た。
- (5) 美術館へ行こう

- ・「春の親子写生会」を5月3日（水・祝）に行い、38人の参加を得た。
- ・夏休みに小中学生を対象とした絵画などの教室を7月25日（木）～27日（土）に開催し、32人の参加を得た。
- ・冬に大人向けの「石膏デッサン公開講座」を12月23日（土）～24日（日）に開催し、22人の参加を得た。

#### (6) 団体レクチャー

- ・学校やカルチャーセンターの団体鑑賞において、要望があつて対応可能な場合に限って20～30分程度のレクチャーを行った。平成30年度はコレクション展で2回、特別展「江戸の戯画—鳥羽絵から北斎・国芳・暁斎まで」で1回、特集展示「生誕150周年阿部房次郎と中国書画」で1回、特別展「ルーヴル美術館展 肖像芸術—人は人をどう表現してきたか」で8回、特別展「フェルメール展」で10回実施した。

### 6. 情報発信、広報宣伝

ホームページに展覧会の見所や展覧会場の写真などを掲載し、即時性のある情報を提供して、展覧会情報等をやさしく説明しながら案内ができるよう努めた。昨年、文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」の助成により、多言語化（英・中簡・中繁・韓）したパンフレットを活用して、情報発信を広げた。

平成30年度の美術館ホームページへのアクセス件数は、1,272,447件であった。

展覧会のポスター掲示やチラシの設置を、様々な広報協力をいただいているあべの地下街等の民間施設、及び各美術館・博物館に依頼し実施している。また、市営地下鉄の公共広報板への広告の掲出も行った。さらに、新聞社、放送局と連携し、新聞への記事掲載やテレビ放映にも努めた。

特別展ごとにマスコミの学芸部・文化部などに案内を送り、開会式の前に報道内見会を開催して、それぞれの展覧会の特質と見どころをギャラリートークなどにより行い、展覧会の広報宣伝の依頼を行った。

また、グーグルアートへの作品画像の提供により美術館の優れたコレクションを世界にアピールすることができた。

また、天王寺公園エリアの魅力向上を目指して、大阪市や関係先と連携して、天王寺公園の魅力発信・情報発信に取り組んだ。「てんしば」運営の近鉄不動産と連携して、公園入り口付近のデジタルサイネージ及びポスター掲示板にて、当館の展覧会案内を広報した。

### 7. 来館者サービスの向上

天王寺ゲートや「てんしば」から美術館への案内表示や美術館へのアクセスを分かりやすくした。今年度は、天王寺公園内連絡橋の撤去に伴って、てんしば側から美術館、茶臼山方面に新たに設置された進入路に案内標示板を新設した。

また、案内表示の多言語化など、来館者により親切な案内板の設置を心がけるとともに、

お客様のニーズをくみ上げて、受付での荷物の預かりや障がいの方の館内案内等を、必要があれば即時実践して、財団ならではのサービスを実施してきた。さらに、ゴールデンウイーク期間中の5月1日、お盆休み期間中の8月14日、また、特別展におけるクリスマス期間中の12月25日、年始の1月2日・3日・4日に臨時開館を実施するなど来館者の利用促進に努めた。

## 8. 施設・設備の維持管理

警備・清掃・設備管理及び保守点検を外部委託し、安全・快適な施設の維持管理に努めている。職員による日常的な安全点検も励行した。

経年による施設や設備関係の老朽化が進み、大阪市とも連携しつつ維持管理に努めた。また、大阪市とともに大規模改修へ向けての検討を進めた。

## 9. 友の会

友の会ニュースを5回発行し、野外写生会を4回、基礎講座を1回開催した。また、友の会の展覧会として、7月3日から7月8日に夏季展、第54回友の会展を2月19日から24日のそれぞれ6日間開催した。

今年度の会員は452人で、昨年度から54人の増となった。

## 10. 美術研究所

美術研究所は、関西を基盤として活躍している質の高い画家が講師として日々の指導を行っている。

絵画コンクールを6回、研究所展覧会を1回、絵画作品批評会を2回、ジョイントセミナーを4回開催した。「美術館へ行こう」として小中学生を対象とした絵画、彫塑、石膏などの教室を1回、親子を対象とした写生会を1回、大人を対象とした石膏デザイン教室を1回開催し、合計92名の参加を得た。

入所検定は3月、6月、9月、1月に行い、計41名の入所者があった。

その結果、平成30年度研究生は133人となり、前年度より7人増となった。

## 7 大阪市立東洋陶磁美術館管理運営事業

平成30年度は、特別展として「フランス宮廷の磁器 セーヴル、創造の300年」と「高麗青磁—ヒスイのきらめき」を開催した。

特別展「フランス宮廷の磁器 セーヴル、創造の300年」では、フランスのセーヴル陶磁都市の所蔵品を中心とした約130件の作品により、セーヴル製作所の約300年にわたる活動を紹介した。セーヴル製作所の前身、1740年に始まったヴァンセンヌの軟質磁器工房時代から、王立製作所として活動した期間、そして日本人を含むアーティストを招いて制作された現代まで、日本では目にすることのできないセーヴルの作品の歴史を包括的に紹介した。

また、特別展「高麗青磁—ヒスイのきらめき」では、大阪市立東洋陶磁美術館所蔵の高麗青磁を中心に、国内の代表作も加えた高麗青磁の至玉の名品が一堂に会し、祈りの場や儀礼、喫茶や飲酒など、用途別に紹介することによって高麗青磁の新たな魅力を紹介した。さらに今回は、近年の調査研究によって近代作と確認された館蔵品を含めて、高麗青磁の再現品も併せて展示し、当時の日本人との深いつながりも明らかにした。約30年ぶりに満を持しての高麗青磁の一大特別展として、多くの反響と各方面から評価を得た。

### 1. 資料の収集、保管事業

芸術的あるいは資料的価値の高い作品の寄贈受入について推進し、計8件(作品数260件287点、評価額12,459万円)の寄贈があった。

総館蔵品数：5,550件 7,391点（平成31年3月31日現在）

また、海外コレクターからの中国陶磁の寄託計1件（作品数8件8点）を受け入れた。

この他、展示事業や調査研究用として、東洋陶磁その他美術に関する書籍等を収集した。

### 2. 展示事業

#### (1) 常設展示（平常展示）

安宅コレクションの中国陶磁・韓国陶磁、李秉昌コレクションの韓国陶磁、日本陶磁などの中から代表的作品を中心に約300点をそれぞれ陶磁史の流れに沿って展示した。

（平成30年4月7日（土）～平成31年2月11日（月・祝）、開催日数計230日、入館者数計82,930人）

また、常設展示に変化と多様性を持たせるため寄贈作品を中心に約20～30点をテーマ・ジャンルごとに企画構成する特集展示を次のとおり開催した。

①特集展「高田コレクション 古代イランの土器と青銅器—形と装飾」

[平成30年7月28日（土）～8月19日（日）]

②特集展「高田コレクション・尾形コレクション ペルシアの陶器—色と文様」

[平成30年12月8日（土）～平成31年2月11日（月・祝）]

## (2)企画展示

企画展「オブジェクト・ポートレイト Object Portraits by Eric Zetterquist」

[平成 30 年 12 月 8 日(土)～平成 31 年 2 月 11 日(月・祝)、開催日数 50 日、

入館者数 10,223 人)

エリック・ゼッタクイスト(1962-)は、現代美術家の杉本博司(1948-)のもとで働きながら現代的な写真表現と東洋の古美術を学び、現在はニューヨークを拠点に活動している。「古陶磁の肖像」とも言える「オブジェクト・ポートレイト」は、古陶磁の細部を高度に抽象化したシリーズである。これまでに、フィラデルフィア美術館(2014年)やバンコクの東南アジア陶磁美術館(2016年)において、所蔵作品を撮影した写真により個展を開催している。本展は、日本で初めてゼッタクイストの作品を紹介するものであり、2016年に作家が当館の所蔵品を撮影した34点の写真を、被写体となった陶磁器作品とともに展示した。

本展は現代作家の作品展であると同時に、所蔵作品をゼッタクイストの視点を通して捉え直す試みでもあった。ゼッタクイストの作品は、展示ケースの内外や、ロビー空間に点在して設置され、通常の順路に捉われず全館を利用して企画展が展開された。陶磁器ではなく現代美術に関心のある、初めて当館を訪れる方も多くみられ、作品と対応する陶磁器を探しながら、友人とともに館内を行き来し展覧会を楽しむ来館者も多く見られた。

美術専門誌『Arts of Asia』に本展特集記事が掲載されたほか、新聞各紙や雑誌に展覧会批評が掲載され、新しい切り口の展覧会として高い評価を得た。全館写真撮影が可能だったこともあり、インスタグラムやツイッターでも反響が大きく、当館公式インスタグラムのフォロワーは本展会期中に約200名増加した。有料率は73パーセントと高く、アンケートでは、「抽象的な絵画と現実に存在する器(しかも実際に使えるモノ)と対比させる展示がとてもすばらしい。今まで一番面白いと感じた」など好意的な声が多く寄せられた。

## (3)特別展示

①特別展「フランス宮廷の磁器 セーヴル、創造の300年」

[平成 30 年 4 月 7 日(土)～7 月 16 日(月・祝)、開催日数 88 日、入館者数 37,798 人]

ゴールデンウィーク期間中の臨時開館:5月1日(火)

フランスのセーヴル陶磁都市の所蔵する作品を中心に、約130件の作品により、セーヴル製作所の約300年にわたる活動を紹介した。セーヴル製作所は1740年にパリ東端のヴァンセンヌに生まれた軟質磁器工房をその活動の始まりとし、国王ルイ15世の庇護を受けて、セーヴルへと移転、王立の磁器製作所となつたのち硬質磁器の開発に成功した。こうした王侯貴族と関連する最初期の作品を集めたプロローグの展示室は、ケース内壁面に華やかな壁紙の造作を施して展示した。現代作品を含むほぼ全点を、許可を得て写真撮影可能としたこともあり、壁紙風の展示空間は写真映えすると好評を得た。展示構成としては、フランス革命後にも時代とともに作風を転換し、アーティストを起用して現代まで品質の高い作品を制作し続けてきた製作所の活動を各時代の代表的な作品によって通史的に紹介した。20世紀初めに流行したロイ・フ

ラーのダンス映像を、このダンサーをモティーフとした作品の展示ケース上部に投影し、動きのある映像と静的な陶磁器を対比的に見られる空間とした。巡回展ではあるが、東京会場ですでに見たという来館者からも「はるかに見やすかった」というアンケートの回答が見られた。大阪会場のみとなる、セーヴル製作所での現代作家の制作記録映像も放映した。

記念イベントとして、セーヴル製作所で制作経験のある、京都の染織家で重要無形文化財保持者・森口邦彦氏（1941-）を招き、館長との対談を実施した。本展によって、陶芸とは異なる分野の関西で活躍する工芸家を招き、意見を聞く貴重な機会となった。

なお、会期中の6月18日には大阪府北部地震が発生したが、免震台が正常にはたらき当日中にすべての作品の無事が確認され、所蔵者には速やかに状況報告をおこなった。展覧会企画から展示に至るまで、セーヴル陶磁都市と当館とが直接関わったことで、非常時にも信頼関係に基づくスムーズな連絡対応が可能となった。

## ②特別展「高麗青磁—ヒスイのきらめき」

[平成30年9月1日～11月25日、開催日数74（実開館72）日、入館者数31,622人]

大阪市立東洋陶磁美術館の所蔵品を中心に、国内の代表作も加えた高麗青磁の至玉の名品が一堂に会し、祈りの場や儀礼、喫茶や飲酒など、用途別に紹介することによって高麗青磁の新たな魅力を紹介した。さらに今回は、近年の調査研究によって近代作と確認された館蔵品を含めて、高麗青磁の再現品も併せて展示し、当時の日本人との深いつながりも明らかにし、多くの来館者の反響を呼び起こすとともに、同館として約30年ぶりに満を持して開催した高麗青磁の大特別展として、各方面から多くの評価を得た。透明で美しい緑青色を帯びる高麗青磁の釉色を宝石の翡翠（ヒスイ）のきらめきに例えたイメージは多くの人の目を引き、本展では全館写真撮影可としたこともあり、ネットや雑誌などでも多く取り上げられた。共催のNHKや毎日新聞社をはじめ主要全国紙や国内外の雑誌でも特集されるなど、メディアの反響も大きかった。展示内容の理解促進のため、日本に加え英語のオーディオガイドを導入し、インバウンドへも配慮した。また、関連映像によるオリジナルのビデオ番組（約12分）を館内やYouTube上で放映し、またホームページ上では広報戦略の一環として会期前から予告動画（2分）を放映した。館蔵品と主要作品の振り下ろし写真を満載した豪華図録は会期中に約2300部を販売し、好評を得た。館長や課長代理の講演会、担当学芸員による連続講座は例年以上の盛況となった。来館者アンケートによると、91.06%が満足と回答し、「この展覧会のためだけに大阪に来た。圧巻の一語に尽きる。大満足」、「キュレーターの方の熱量が伝わってくる様で素晴らしい」、「これだけの高麗青磁を鑑賞したのは初めて、色の美しさ形文様の美しさを存分に味わう事が出来感動した」、などの賞賛の声が多く寄せられた。なお、本展は韓国国立中央博物館の特別協賛（500万円）を得て開催された。

## 3. 調査・研究事業

展示事業に関する調査研究として、高麗青磁関連の特別展を参観調査し、とくに高麗青磁と

の関連や比較研究のため、五代から北宋の耀州窯を中心に調査を実施した。また、東アジアにおける喫茶文化、飲酒文化に関する資料を収集し、高麗青磁の用途に関する資料などを収集した。さらに、高麗末から朝鮮初期の高麗青磁象嵌や粉青に関する調査も行った。

韓国陶磁調査研究事業では「中後期高麗青磁の研究」をテーマとして韓国や中国の出土資料や窯址等の調査を行った。さらに、高麗と北宋汝窯の関連の様相をさぐるため、資料を調査してその成果を公開講座「高麗と汝窯の新発見」で発表するとともに、『李秉昌博士記念 韓国陶磁研究報告 12 「高麗と汝窯の新発見』』を刊行した。

なお、外部資金による研究では、科学研究費補助金等計 3 件（計 2,180,000 万円（間接経費含む））を獲得した。

#### 4. 教育・普及事業

##### (1) 講演会等の実施

展覧会内容の理解促進や、調査研究の成果を還元するため講演会、講座、研究会等を開催した。

###### ① 講演会

- ・特別展「フランス宮廷の磁器 セーヴル、創造の 300 年」記念対談  
「森口邦彦×出川哲朗」森口邦彦氏（染織作家、重要無形文化財「友禅」保持者）  
計 1 回、参加者 65 人
- ・特別展「高麗青磁—ヒスイのきらめき」記念講演会  
「高麗仏画から見る祈りの文化」井手誠之輔氏（九州大学教授）  
計 1 回、参加者 66 人
- ・特別展「高麗青磁—ヒスイのきらめき」館長講演会  
「宋磁と高麗青磁」出川哲朗（大阪市立東洋陶磁美術館館長）  
計 1 回、参加者 78 人
- ・企画展「オブジェクト・ポートレイト Object Portraits by Eric Zetterquist」館長講演会  
「ものの肖像—現代写真と古美術」出川哲朗（当館館長）  
計 1 回、参加者 47 人

###### ② 講座

- ・ナレッジ・キャピタル 東洋陶磁の魅力Ⅲ 陶磁器にみる世界特別展  
「陶磁器の映す時代の価値観—特別展「フランス宮廷の磁器 セーヴル、創造の 300 年」」  
宮川智美（大阪市立東洋陶磁美術館学芸員）  
「特別展『高麗青磁—ヒスイのきらめき』への招待」  
鄭銀珍（当館学芸員）  
「オブジェクト・ポートレイト ニューヨークの写真家のみた東洋陶磁コレクション」

- 出川哲朗（当館館長）  
計2回、参加者計130人
- ・特別展「高麗青磁—ヒスイのきらめき」連続講座  
「高麗青磁展への誘い」鄭銀珍（大阪市立東洋陶磁美術館学芸員）  
計3回、参加者計121人
  - ・李秉昌博士記念公開講座12「高麗と汝窯の新発見」  
孫新民氏（中国・河南省文物考古研究院研究員）、韓貞華氏（韓国・扶安青瓷博物館学芸士）、小林仁（大阪市立東洋陶磁美術館学芸課長代理）による最新の研究成果の発表  
計1回、参加者118人
  - ・シンポジウム「現代アートと古陶磁との出会い」  
エリック・ゼッタクイスト氏（美術家）、高安啓介氏（大阪大学文学研究科准教授）、久野はるな氏（イムラアートギャラリー）、出川哲朗（当館館長）、木ノ下智恵子氏（大阪大学共創機構社学共創本部准教授／アートエリアB1運営委員）、宮川智美（当館学芸員）  
計1回、参加者計47人
- ③ 学芸員アフタヌーン・レクチャー
- ・第38回「破損した伊万里磁器の修復と研究—國立故宮博物院との共同研究の成果報告」小林仁（当館学芸課長代理）／「日本における陶磁器修復の歴史」巖由季子（大阪市立東洋陶磁美術館学芸員）
  - ・第39回「汝窯と高麗青磁—韓国『Lee & Won 国際招請講演会10周年記念討論会』参加報告」小林仁（当館学芸課長代理）  
計2回、参加者計61人
- ④ 学芸員による見どころ解説
- ・特別展「フランス宮廷の磁器 セーヴル、創造の300年」宮川智美（当館学芸員）  
計6回、参加者計282人
  - ・特別展「高麗青磁—ヒスイのきらめき」鄭銀珍（当館学芸員）  
計3回、参加者計192人

(2) 博物館学・実習

博物館学を開講する大学の団体見学4校87人（桃山学院大学、奈良大学、京都女子大学、大阪市立大学）を受け入れ、当館学芸員がレクチャーを行った。

(3) ボランティアによるガイド事業

通常は特集展・平常展の会期中のみ、土・日・祝日の午前と午後にボランティアによる

ギャラリーガイドを行うが、本年は企画展が所蔵品を主体とするものだったため、企画展期間中にも実施した。計 29 回、参加者計 481 人

また、平日については、団体見学者の入館に際しガイド予約のあった場合にギャラリーガイドを実施した。計 4 回、参加者計 110 人

このボランティアガイド登録者 33 名に対し、ガイド事業の充実を図るため、展覧会ごとに当館学芸員が研修を行った。計 4 回。

## 5. 各種団体との連携

協会の各館・所との連携強化を図るとともに、各種団体、学校等との連携により、効果的な広報活動と入館者へのサービスの充実を図った（ポスター、チラシ、パンフレットの交換設置、掲載協力、相互情報提供等）。また、中央公会堂、中之島図書館、国立国際美術館、国際会議場、大阪大学、アートエリア B1 等と連携し、水都大阪、中之島まつり、光のルネサンスなど中之島地域の活性化につながるイベントにも協力した。

## 6. 他の博物館等との連携

国内外の美術館、博物館、研究機関等との多角的な連携による共同研究、展覧会の共催、シンポジウム・研究会の開催等の事業協力を実施した。

- ① 台北・國立故宮博物院南院開館特別展（「楊帆萬里－日本伊萬里瓷器特展（出帆万里－日本伊万里磁器特別展）」への出品（長期貸出）
- ② 台北・國立故宮博物院特別展「亞洲探検記－十七世紀中西交流伝奇」への出品
- ③ 台北・國立故宮博物院との共同研究「清宮伝世瓷器に関する研究と修復」の実施と「伊万里瓷器の研究と科学分析・修復に関する国際シンポジウム」の共催
- ④ サントリー美術館、山口県立萩美術館・浦上記念館、静岡市美術館との「フランス宮廷の磁器 セーヴル、創造の 300 年」展開催協力
- ⑤ 世田谷美術館特別展（「没後 40 年 濱田庄司展」）への出品
- ⑥ 大阪大学及びアートエリア B1 とのシンポジウム「現代アートと古陶磁との出会い」共催（企画展「オブジェクト・ポートレイト Object Portraits by Eric Zetterquist」）

## 7. 情報発信・広報宣伝

ホームページ、館案内パンフレット、年間展示予定、ポスター・チラシ、マス・メディアの活用などにより、東洋陶磁美術館の活動を広く周知した。グーグル・アートなどとの提携により、優れたコレクションを世界に向けて情報発信した。ホームページの年間アクセス数は 880,266 件であった。

そのほか、入館者に対するアンケート調査を展覧会ごとに実施し、入館者のニーズを把握して事業に反映するとともに、効果的な情報提供、広報活動等に活かした。

## 8. 来館者サービスの向上

平成 28 年度から引き続き「大阪 Free Wi-Fi」を館内で使用し、海外からの来館者をはじめとした利用者のニーズに応えた。また、平常展示において多言語対応（日・英・中・韓）の音声ガイド機のレンタルを継続し、主な館蔵品 60 点の作品解説を行った。

海外からの利用者に対しては、これまで館内サイン・常設展キャプションなどについても英文を併記して対応してきた。近年では特別展・企画展の展示パネルなどについて、英語以外にも内容に応じた言語を加えるなどの工夫をしている。ホームページについても、4 か国語（日・英・中（繁・簡体字）・韓）の構成として情報を発信してきた。30 年度も引き続き展覧会チラシ・配布資料の多言語化、受付での外国語対応スタッフの充実を図った。

光のルネサンス期間中には 19 時までの開館時間延長を行い、来館者へのサービスに努めた。

## 9. 施設の維持管理

入館者が安全かつ快適に施設を利用できるよう、建物設備の維持保全をはじめ、電気、機械設備などの定期点検等を実施し適切な維持管理に努めた。

警備・清掃及び設備等の保守点検を外部委託し、安全・快適な施設の維持管理に努めた。職員による日常的な安全点検も励行し、職場安全衛生委員会の職場巡視も行っている。防災対策では、館職員だけでなく、警備、設備、看護・受付などの業務委託従事者や喫茶の従事者も一体となって避難訓練を実施し、有機的かつ効果的な防災体制の充実を図った。

## 10. 出版等事業

展覧会図録（特別展「フランス宮廷の磁器 セーヴル、創造の 300 年」、特別展「高麗青磁—ヒスイのきらめき」、企画展「オブジェクト・ポートレイト Object Portraits by Eric Zetterquist」（冊子として））の製作販売を行い、継続的に館蔵品図録（「堀尾幹雄コレクション濱田庄司」、「掌中の美 沖正一郎コレクション鼻煙壺」など）やミュージアムグッズの販売を行った。

## 11. 友の会事業

講演会、研究会、研修や「友の会通信」の発行などを通して会員（会員数 304 人、平成 30 年 3 月末時点）へ東洋陶磁に関する情報 提供等を行う一方、美術館の利用促進や普及活動などに会員の協力を求めるなど相互連携を図った。なお、翌年度からの地方独立行政法人化に向けて友の会事業リニューアルの準備も進めた。

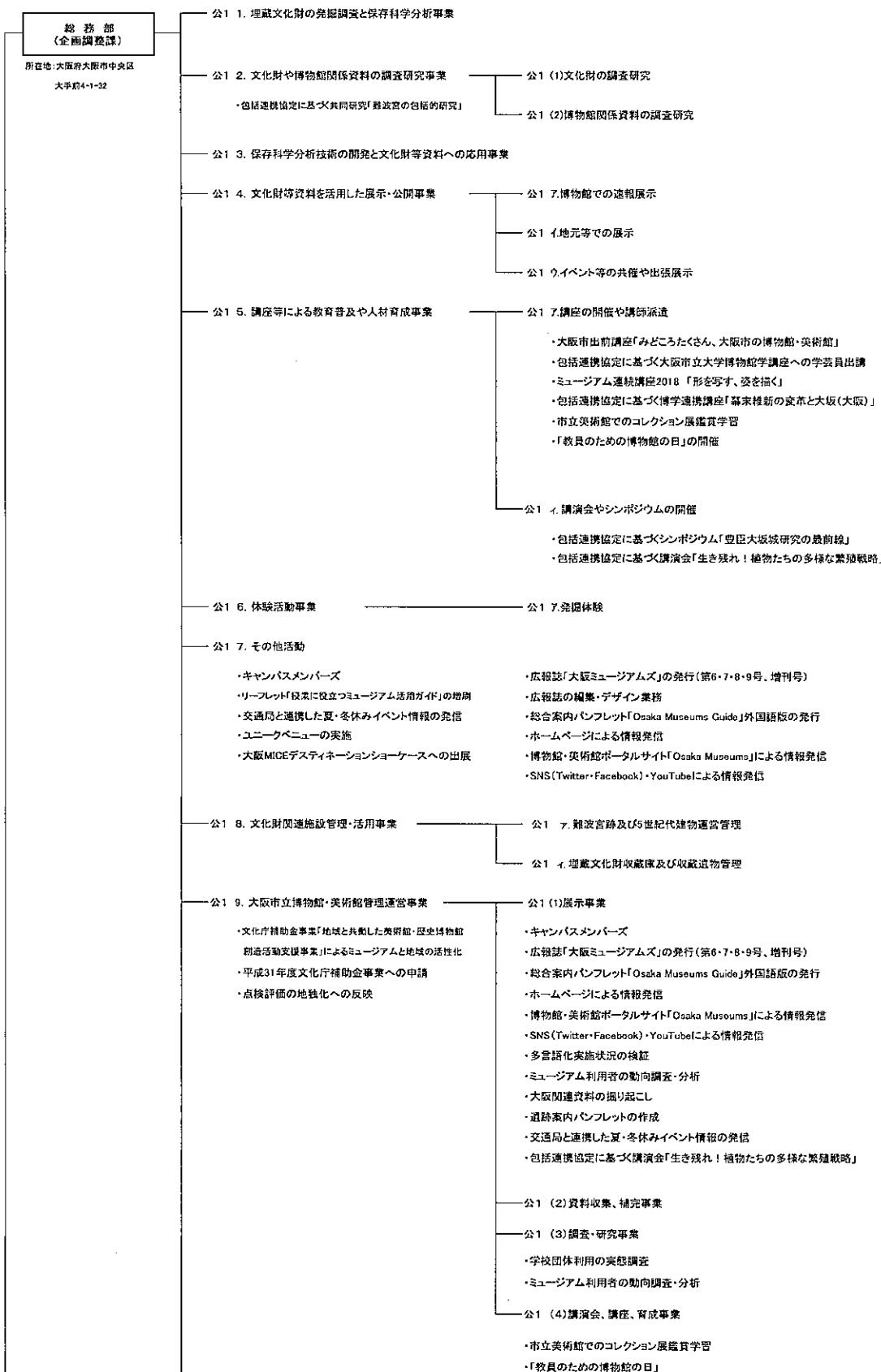
・友の会通信：第 126～129 号、4 回発行、発行部数各 800 部

平成30年度[公益事業対照表]

1. 総務部企画調整課

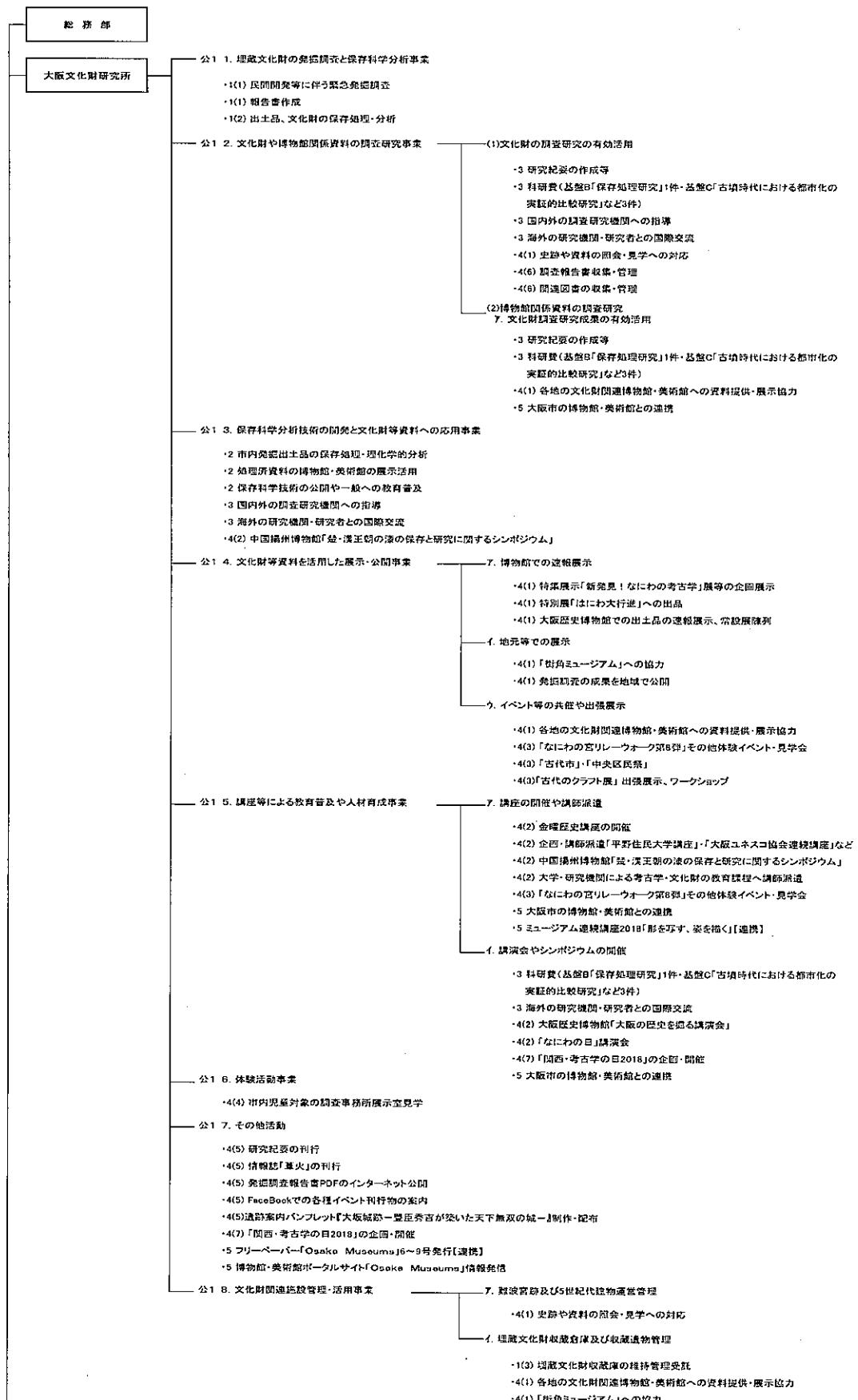
各認定との連携について									
当協会公益事業等の一覧									
事業報告書の事業名									
1. 広報会員事業									
広報誌「大阪ミュージアムズ」の発行(第6・7・8・9号、増刊号)									
ホームページによる情報発信									
博物館・美術館ポータルサイト「Osaka Museums」による情報発信									
SNS(Twitter・Facebook)・YouTubeによる情報発信									
総合案内パンフレット「Osaka Museums Guide」各回国版の発行									
交通局と連携した夏・冬休みイベント情報の発信									
2. 文化庁補助金によるミュージアムと地域の活性化									
多言語化実施状況の掲載									
ミュージアム利用者の動向調査・分析									
大阪市連携企画の取り組み									
連絡案内パンフレットの作成									
3. 民間事業者との連携、民丸/クラウドの活用									
広報誌の開設・デザイン業務									
ユニークペニーの実施									
大阪MICEデスティネーションショーケースへの出展									
4. 教育普及に関する連携									
(1) 小・中学校との連携									
学校毎体利用の実態調査									
市立美術館でのコレクション標本販売									
「教員のための博物館の日」の開催									
リーフレット「授業に役立つミュージアム活用ガイド」の作成									
(2) 高等学校・大学との連携									
キャンパスメンバー									
包括連携協定に基づく共同研究「姫路城の包括的調査」	○								
包括連携協定に基づく大阪市立大学博物館講座への芸術員出張									
包括連携協定に基づくシンポジウム「豊臣大阪城研究の最前線」									
包括連携協定に基づく講演会「生き残れ！植物たちの多様な繁殖戦略」									
包括連携協定に基づく博物館講座「再録！鳥居絵巻の変遷と大阪（大坂）」									
ミュージアム連携講座2018「形を写す、姿を描く」の開催									
(3) 博物館・その他の機関との連携									
ミュージアム連携講座2018「形を写す、姿を描く」の開催									
大阪市出前講座「みどりごとくさん、大阪市の博物館・美術館」									
5. 直接評議									
直接評議の実施への反映									
6. 外部資金の獲得									
文化庁補助金事業への申請									
平成31年度文化庁補助金事業への申請									

## 平成30年度 事業・組織体系図



## 2. 大阪文化財研究所

当協会公共事業等の一覧		公1										公2	
事業報告書の事業名		(1) 設立・運営・育成事業	(2) 調査・研究事業	(3) 講習会・講座・育成事業	(4) 講演・研究事業	(5) 学術研究事業	(6) 大阪市立博物館・美術館管理運営事業	(7) その他の活動	(8) 文化財関連施設運営・活用事業	(9) (一) 告示事業	(10) その他の事業		
理歴文化財の発掘調査・報告作成												月次大綱をもとに、月に別して実施することのないもの。月の初めに実施される場合は、月の初めに実施されることのないもの。月の初めに実施される場合は、月の初めに実施されることのないもの。月の初めに実施される場合は、月の初めに実施されることのないもの。月の初めに実施される場合は、月の初めに実施されることのないもの。月の初めに実施される場合は、月の初めに実施されることのないもの。月の初めに実施される場合は、月の初めに実施されることのないもの。月の初めに実施される場合は、月の初めに実施されることのないもの。月の初めに実施される場合は、月の初めに実施されることのないもの。月の初めに実施される場合は、月の初めに実施されることのないもの。	
(1) 文化財調査実証事業													
民間調査等に伴う歴史整理調査	○												
報告書作成	○												
(2) 保存処理・分析事業													
出土品・文化財の保存処理・分析	○												
(3) 文化財保護技術の管理事業												○	
埋蔵文化財の発見の実績管理会議													
2. 保存・活用技術の開発・応用													
古文書・文書の保存処理・理学的分析				○									
歴史資料の博物館・美術館の展示活用				○									
保存・活用技術の公開や一般への啓蒙普及				○									
3. 文化財に関する研究													
研究委員の登録等		○	○										
「理歴」(真跡が保存されているもの)、「古跡時代における保存状況」など)		○	○					○					
国内外の調査研究機関への指導		○		○									
海外研究機関・研究者との国際交流		○		○				○					
4. 教育・普及事業													
(1) 告示等はじめとする資料運用													
特異展示「新免! にいわの考古学」等の企画展示					○								
特別展「はにわ行進」への出展					○								
大阪歴史博物館での出土品の連続展示・常設展移行					○								
各地の文化財連携会館・美術館への資料提供・展示協力		○			○					○			
「新潟ミュージアム」への協力					○					○			
免選投票の実施地図を公開					○					○			
史跡資源の巡回・見学への対応		○								○			
(2) 課題等による教育普及や人材育成													
会場説明会の開催						○							
大阪歴史博物館「大阪の歴史を語る講演会」						○							
「なにわの日講演会」						○							
企画・試験講座「平野市民大講堂」「大阪ユースに合わせて選ばれています」など						○				○			
中国鳥羽市博物館「歴・淡王廟の辺の保存と研究に貢献するシンポジウム」					○				○				
大学・研究機関による考古学・文化財の教育講習会・講師派遣						○				○			
(3) 地域と連携したイベント等の共催・出張展示													
「なにわの空きレーザークリスマス」その他のイベント・見学会						○				○			
「古代市」「中央区民祭」						○				○			
「古代のクラフト展」出張展示・ワークショップ						○				○			
(4) 体験活動事業													
市内児童対象の調査奉仕所展示室見学の実施								○					
(5) 署報誌発行										○			
HPの充実・各種情報発信										○			
研究会の開催										○			
情報誌「真矢」の刊行										○			
免選投票書類PDFのインターネット公開										○			
Facebookでの各種イベント刊行物の案内										○			
免選投票書類PDFの案内「大阪城址・豊臣秀吉が築いた天下無双の城」										○			
(6) 開館資料の収集・管理													
調査報告書収集・管理					○								
遺跡調査の収集・管理					○								
(7) 世界遺産の選定													
「関白・考古学の日2018」の企画・認定								○		○			
5. 博物館・美術館との連携													
大阪市の博物館・美術館との連携					○			○	○				
ミュージアム連携講演2019「形と文字」を聞く【連携】								○					
フリーペーパー「Osaka Museum」B-1号発行【連携】									○				
博物館・美術館ポータルサイト「Osaka Museum」情報発信									○				

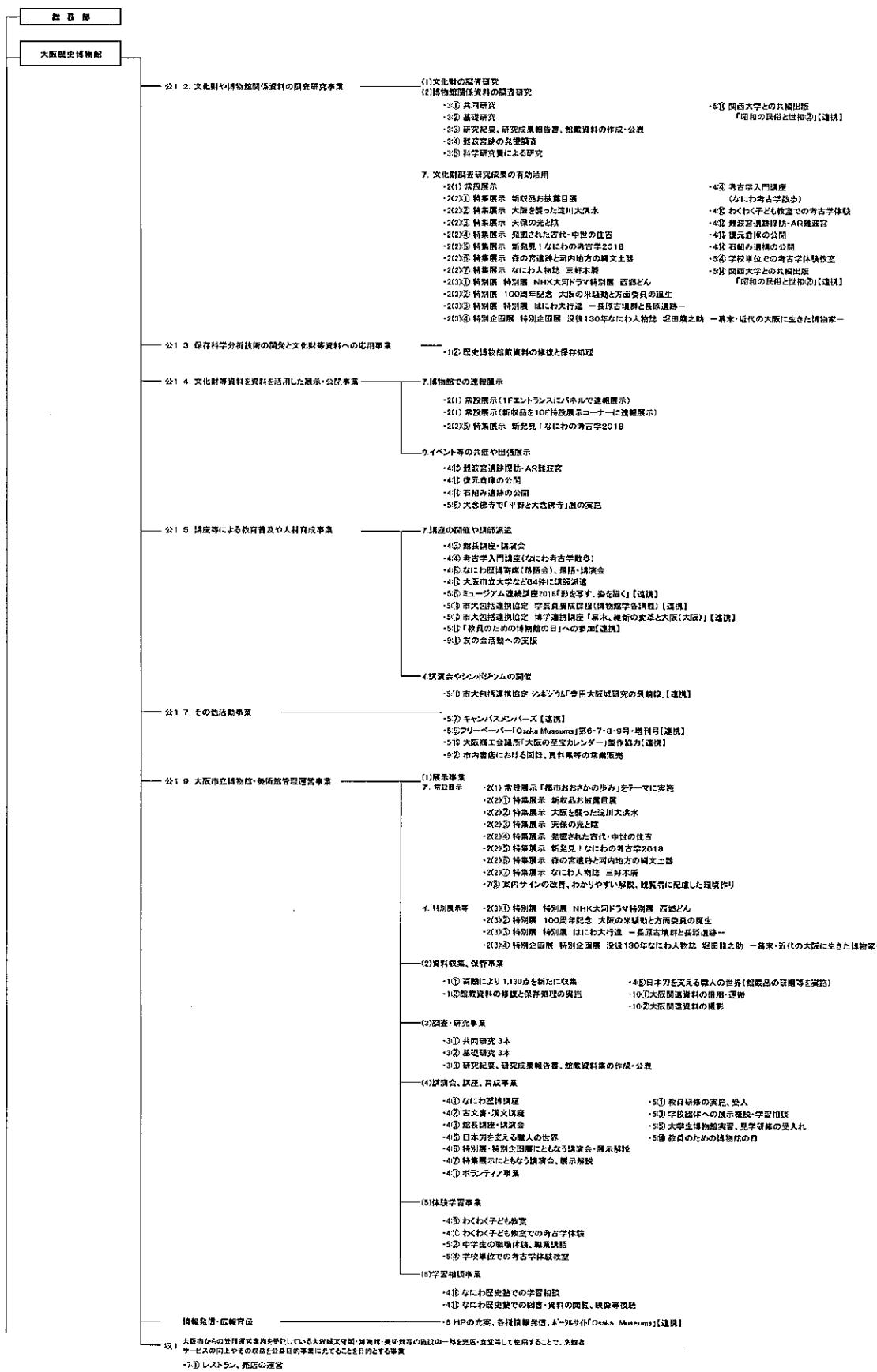


平成30年度[公益事業対照表]

3. 大阪歴史博物館

事業報告書の事業名	当該公益事業等の一覧	公1		公2
		実1	実2	
1. 財政の状況	①収支に上り、100点を既に既東 ②総額資料の算定と既存実施の実施	○	○	
2. 既存実施	(1)文書展示 ①歴史的背景 ②大和をめぐる立川大洪水 ③天王の光と輝 ④空襲された時代・中世の住吉 ⑤新発見！ なにわの古学2018 ⑥もの农耕とその他の古文書 ⑦なにわ人情記 三軒木舟	○	○	
	(2)音楽展示 ①新大阪お祭り行進曲 ②大阪をめぐる立川大洪水 ③天王の光と輝 ④空襲された時代・中世の住吉 ⑤新発見！ なにわの古学2018 ⑥もの农耕とその他の古文書 ⑦なにわ人情記 三軒木舟	○	○	
	(3)映像・特設会場展 ①科探屋 NHK大阪ドラマ祭祭 西野さん ②科探屋 100周年記念 大阪の本筋ひととての誕生 ③科探屋 はなにわ大行進～長崎古墳と奈良遺跡～ ④科探屋 まちなかおでかけ ⑤科探屋 まちなかおでかけ	○	○	
3. 調査・研究事業	①大河研究 ②底本研究 ③研究会、研究会資料作成、総括資料系の作成・公表 ④社会貢献の実証研究 ⑤研究会による研究会の開催	○	○	
4. 教育・文化普及・児童支援	①なにわ母語講座 ②古文書講座・漢文讲座 ③校歌講座・講習会 ④古字入門講座(「なにわ古字教室」) ⑤日本刀と文政と城人の世界2018 ⑥特設展・特設企画にむしろ講演会、展示解説 ⑦特設展にむしろ講演会、展示解説 ⑧なにわ母語講習会(講話)、講話・講演会 ⑨わいわい子し語室 ⑩わいわい子ども教室での考古字体験 ⑪小川アーティスト事業 ⑫社会実践授業・AIP講習会 ⑬市民講師の公認 ⑭石組み達達の公認 ⑮大阪市立立寄駅への講師派遣 ⑯なにわ母語会の会員登録 ⑰なにわ母語会での団員・資料の回収、販賣部設置	○	○	
5. 学校・市町等との連携	①教育研修 ②中学生の職場体験・職業講話 ③学年別に「おもてなし」学習会 ④学校運営会議 ⑤大阪市立立寄駅での講師派遣 ⑥なにわ母語会の会員登録 ⑦キッズ・スクール(「AIP講習」)	○	○	
	⑧ミニ・アート・連続講座2018「新を学ぶ、姿を描く【連携】」 ⑨クリエーター「Osaka Museum」第6・7・8・9月・地元刊行【連携】 ⑩市立社会説明員講習会 字形改良実践会(字体組学習講習会)【連携】 ⑪市立社会説明員講習会 シラシラ! 廉白大橋駅前の駅前緑地【連携】 ⑫なにわ古字教室は「古字通説会(古文、古字の変遷と大阪(大阪)古文)」 ⑬「教員たちのまち歩きの日」への参加(連携) ⑭なにわ古字との共創講習(初和の段落と世界2)【連携】 ⑮大阪西工芸講習会(大阪市夏宝ルーナ一作はがけ)【連携】	○	○	
6. 情報発信・広報宣伝	①HPの充実、各種情報発信、ホームページ「Osaka Museum」【連携】	○		
7. プロモーションの向上	①マスコット、市民の選定会 ②大阪府民票の位置 ③案内サインの改善、わかりやすい案内、対象者に配慮した標識作り	○	○	
8. 施設の運営管理	④施設の運営管理	○	○	
9. その他・その他事業	①次の企画への反映 ②市内商店での店舗名表示	○	○	
10. 文化行政等事業(地域の魅力再発見・活用・活用)	①大阪府連携資料の巡回・巡回 ②大阪府連携資料の巡回	○	○	

平成30年度 事業・組織体系図

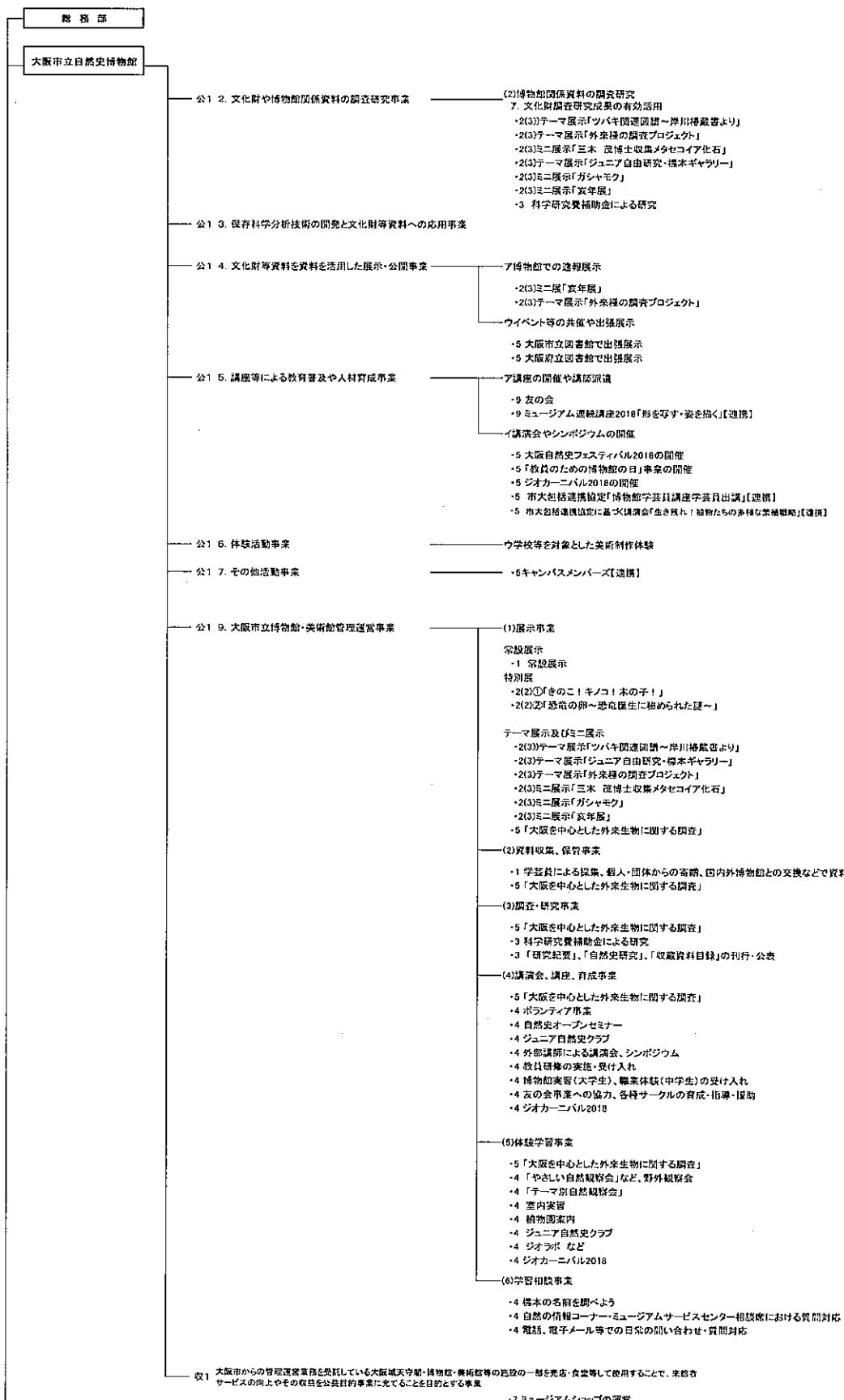


平成30年度[公益事業対照表]

## 4. 大阪市立自然史博物館

当協会公益事業の一覧		公1										公2		
1. 活動の収集、保存事業	2. 資料展示	3. 研究事業	4. 文化財等の保存・活用事業	5. 体験活動事業	6. 大阪市立自然史博物館運営事業	7. その他活動事業	8. 文化財等の保存・活用事業	9. 大阪市立自然史博物館運営事業	10. 展示事業	11. 分散展示	12. 研究開発事業	13. 教育普及事業	14. 友の会	
子雲による収集、個人・団体からの寄贈、国内外団体との交流などによって収集														○
1. 指示書実	(1)常設展示													○
	(2)特別展示		(ア)「このこ!キノコ!木の子!」											○
			(乙)「あ飛の原~熱帯性に魅せられた夏~」											○
	(3)特別講習等													○
3. 研究事業	4. 教育・普及事業	5. 学校・市民等との連携	6. 情報発信・広報宣伝	7. 末対応サービスの向上	8. 友の会									
科学研究費補助金による研究	「やさしい自然観察会」	「大阪市立自然史博物館」による講習	ホームページの更新、各種情報配信、メールマガジン「Osaka Museums」運営	室内サインの改善、わかりやすい解説等、授業等に配慮した環境作り	友の会金活動支援									
「研究記録」、「自然史研究」、「自然史資料」の刊行・公表	「テマ別自然観察会」	「大阪市立自然史博物館」による研究												
	室内文具													
植物園室内														
ジュニア自然史クラブ														
ジオラバなど														
ボランティア事業														
自然史オープンセミナー														
外語訳詞による講習会、シンポジウム														
教員研修の実施・受け入れ														
博物館実習(大学生)、體育体験(中学生)の受け入れ														
友の会会員への協力、各種サークルの育成・指導・援助														
標本の名前を揃へう														○
自然の情報コーナー・ミュージアムサービスセンター(総務部における貢献対応)														○
電柱、電子メール等での日常の問い合わせ・質問対応														○
5. 学校・市民等との連携														
「大阪を中心とした生き物に関する講習」														
大阪自然史アドバイス(平成28年)														○ ○
大阪市立自然史博物館で出張展示														○ ○
「音楽のための博物館の日」														
市大包括連携協定・博物館学芸員講座学芸員出講(選択)														
ジオカーニバル2018														○
大阪府立自然史博物館にて「大阪府立自然史博物館」運営														○
ミュージアム運営調査の写真を寄付・譲り受け(選択)														○
キャンドルスリーパーズ(選択)														
6. 情報発信・広報宣伝														
ホームページの更新、各種情報配信、メールマガジン「Osaka Museums」運営														○
7. 末対応サービスの向上														
室内サインの改善、わかりやすい解説等、授業等に配慮した環境作り														○
「大阪市自然史博物館の図書免役化事業」														○
ミュージアムショップの運営														○
8. 友の会持育会														○
9. 友の会														
友の会金活動支援														

## 平成30年度 事業・組織体系図



収1 大阪市からの管理運営業務を受託している大阪城天守閣・博物館・美術館等の施設の一時を充店・食事等して使用することで、来館者サービスの向上やその収益を公益目的事業に充てることを目的とする事業

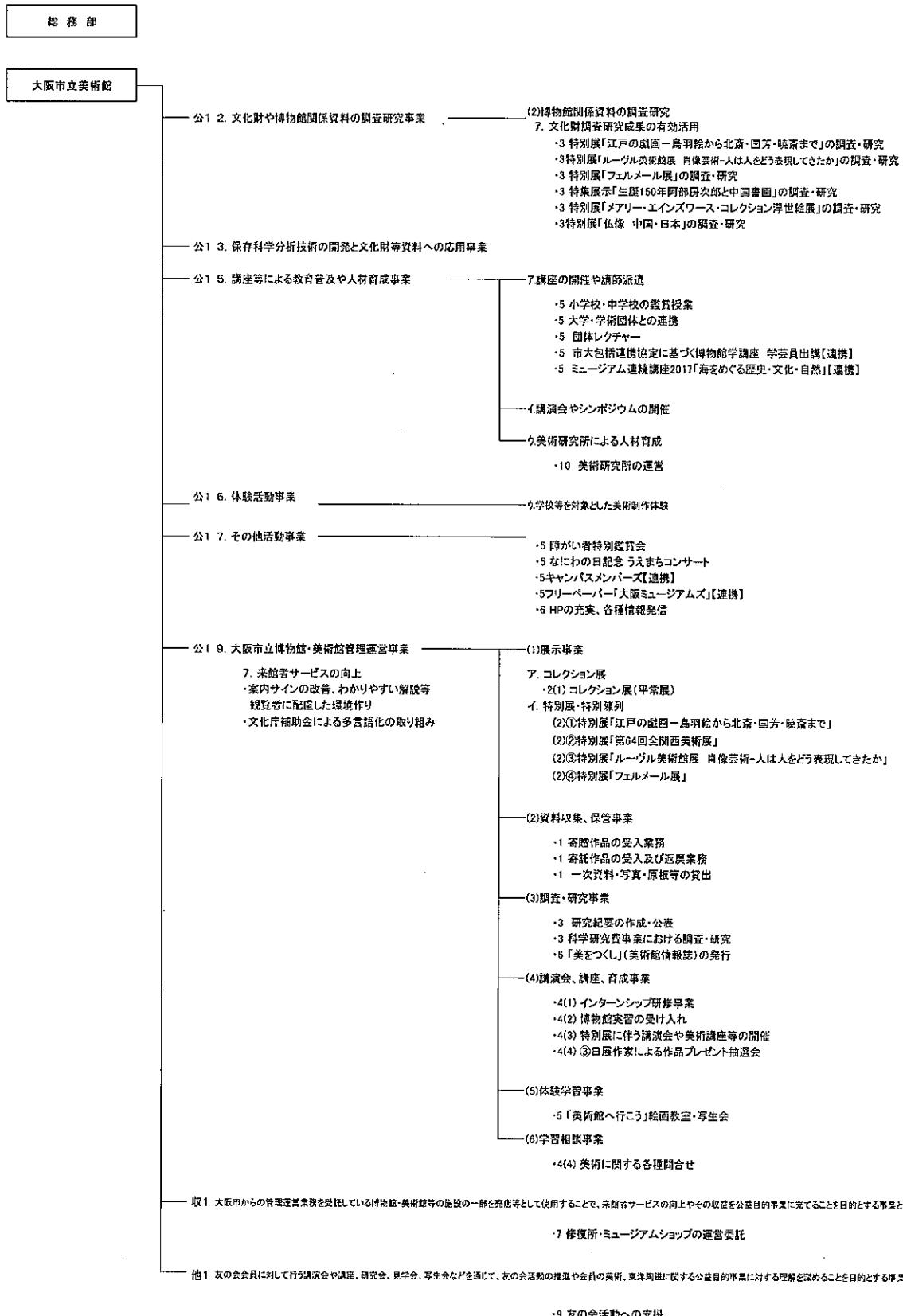
・7 ミュージアムショップの運営

### 平成30年度[公益事業対照表]

#### 5. 大阪市立美術館

当協会公益事業等の一覧											総1	
公1											総2	
1. 貢献の収集、保存・貸出等事業	2. 展示事業	3. 研究・研究事業	4. 学校・教育等の連携	5. 文化財や伝統文化の継承事業	6. 体験活動事業	7. その他の活動事業	8. 大型特別展開催・活用事業	9. 大阪市立美術館・美術館研究会等事業	10. イベント等の実施展示	11. ワークショップ・講習会等	12. 公益活動	
<input type="checkbox"/> 古墳の受入保管 <input type="checkbox"/> 古墳の受入れ及び返却業務 <input type="checkbox"/> 一次資料の貸出伝票決算事務、写真・送信料の貸出事務	<input type="checkbox"/> (1)コレクション展(各役割) ①コレクション展(平常展) <input type="checkbox"/> (2)特別展 ④特別展「江戸の庭田・鳥羽絵から北斎・田芳・秋吉まで」 ⑤特別展「第4回企画展西郷所蔵」 ⑥特別展「ルーヴル美術館展 齊藤翁舟 人は人どう表現してきたか」 ⑦特別展「フルメール展」	<input type="checkbox"/> ①研究記録の作成・公表 ②特別展「江戸の庭田・鳥羽絵から北斎・田芳・秋吉までの研究・研究」 ③特別展「ルーヴル美術館展 齊藤翁舟 人は人どう表現してきたかの調査・研究」 ④特別展「フルメール展」の研究・研究 ⑤特別展「生誕150周年藤原次郎と中国書」の調査・研究 ⑥特別展「アーティスト・イン・ワース・コレクション(西洋版画)」の調査・研究 ⑦特別展「仏像 中世・日本」の研究・研究 ⑧科学研究費事業における研究、研究	<input type="checkbox"/> ①小学校・中学校の教育事業 ②大学・学術団体との連携 ③まちづくり教育講習会 ④なまむわの日記念うえまもコンサート ⑤「貴重品へ行こう」巡回検査・寄生会 ⑥巡回レクチャー ⑦市大括連携協定に基づく博物館学講座 学芸員出講(連携) ⑧ミュージアム運営講座(連携) ⑨キャンパスメンバー(連携) ⑩フリーペーパー「大阪ミュージアムズ(連携)」	<input type="checkbox"/> ①文化財や伝統文化の継承のための研究会の開催 ②文化財や伝統文化の継承のための研究会の開催 ③文化財や伝統文化の継承のための研究会の開催 ④文化財や伝統文化の継承のための研究会の開催	<input type="checkbox"/> ①イベント等の実施展示 ②アート作品での実施展示 ③アート作品での実施展示	<input type="checkbox"/> ①学校等を対象とした実習制作体験 ②アート体験 ③アート体験	<input type="checkbox"/> ①ワークショップ・講習会等 ②美術館研究会等 ③美術館研究会等	<input type="checkbox"/> ①ワークショップ・講習会等 ②美術館研究会等 ③美術館研究会等	<input type="checkbox"/> ○ <input type="checkbox"/> ○ <input type="checkbox"/> ○			
2. 貢献事業	3. 研究・研究事業	4. 学校・教育等の連携	5. 文化財や伝統文化の継承事業	6. 体験活動事業	7. その他の活動事業	8. 大型特別展開催・活用事業	9. 大阪市立美術館・美術館研究会等事業	10. イベント等の実施展示	11. ワークショップ・講習会等	12. 公益活動	13.	
<input type="checkbox"/> (1)インター・石塚事業 ①インターネット登録事業 <input type="checkbox"/> (2)博物館実習 ①博物館実習の受け入れ <input type="checkbox"/> (3)記念講演会 特別展に伴う講演会や奥歴挙止等の開催 <input type="checkbox"/> (4)普及イベント 日臣作家による作品コレクション活用会 美術で語る各種企画会												
6. 学校・教育等の連携	7. まちづくり・広報宣伝	8. 記念・奨励の授賞管理	9. 友の会	10. 美術研究所								
<input type="checkbox"/> ①小学校・中学校の教育事業 ②大学・学術団体との連携 ③まちづくり教育講習会 ④なまむわの日記念うえまもコンサート ⑤「貴重品へ行こう」巡回検査・寄生会 ⑥巡回レクチャー ⑦市大括連携協定に基づく博物館学講座 学芸員出講(連携) ⑧ミュージアム運営講座(連携) ⑨キャンパスメンバー(連携) ⑩フリーペーパー「大阪ミュージアムズ(連携)」	<input type="checkbox"/> 「美をつくり」美術館情報誌の発行 HPの充実、各種情報強化、ホームページOsaka Museum【連携】		<input type="checkbox"/> 友の会活動への支援 <input type="checkbox"/> 友の会活動への支援	<input type="checkbox"/> 美術研究所の運営								

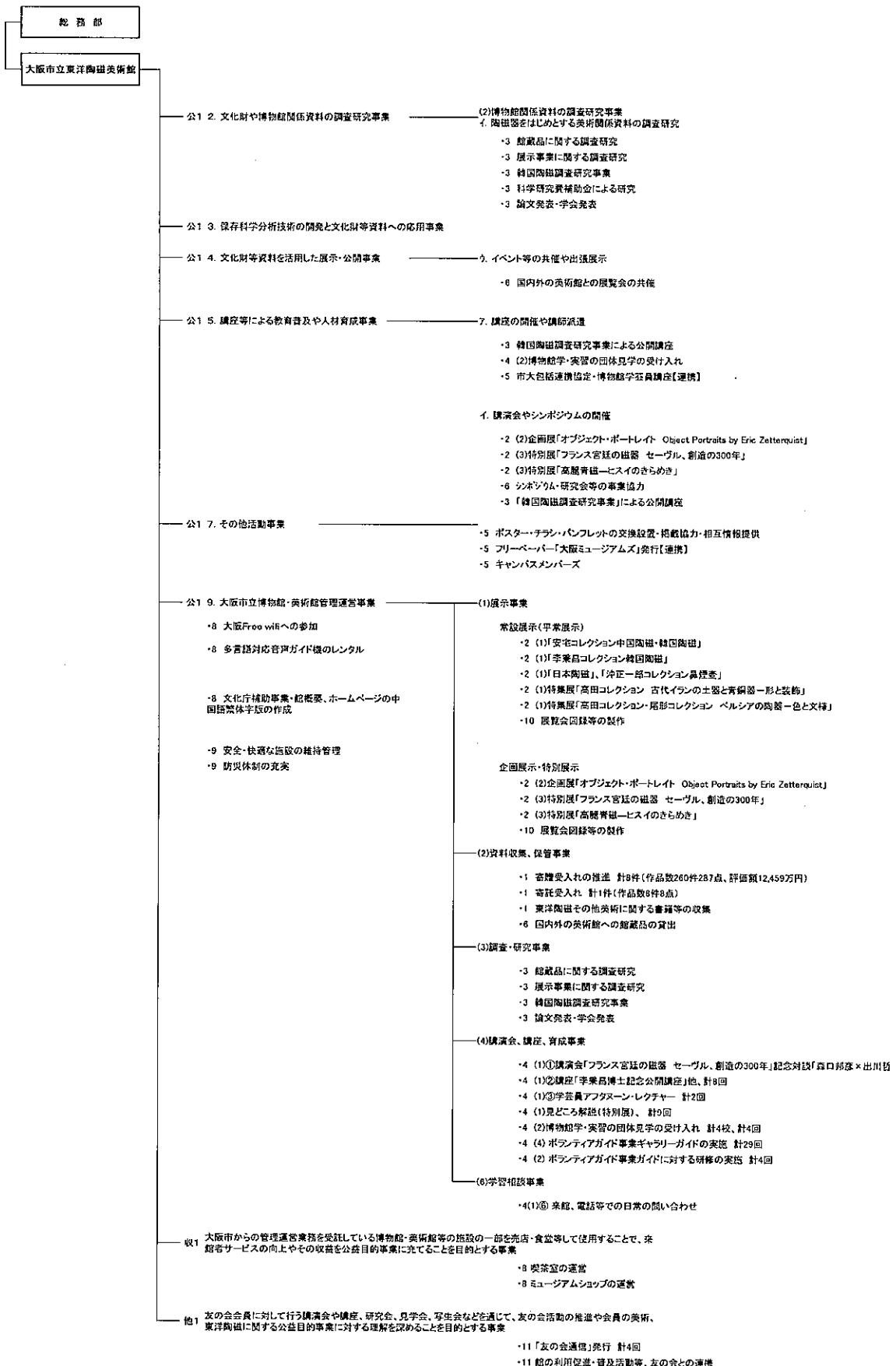
## 平成30年度 事業・組織体系図



平成30年度[公益事業対照表]

6. 大阪市立東洋陶磁美術館

当該公益事業等の一覧		公1	公2	公3
事業報告書の事業名				
1. 収支の収支、収支差額				
収益の収入・計8件(作品数280件283点、計額額12,455万円)				
販賣品の収入・計1件(作品数18点)				
運営費その他の費用に於ける子分類別収支額				
2. 運営事業				
(1)企画展示(平成展示)				
安宅コレクション「西田町・松田美術」	○			
李真ゴブラン絹画展	○			
日本陶磁、井口一郎コレクション展覧会	○			
朴真喜「真田コレクション」古代チランの土財と青銅器—ひととみゆき	○			
朴真喜「真田コレクション・絹引コレクション ベルシアの陶器—色と文様」	○			
(2)企画展示				
「オブジェクトポートレート Object Portraits by Eric Zetterquist」	○			
(3)特別展示				
「フランス狂想曲の色彩 セーヴル、新作の300年」	○			
「真鍋吉雄—ヒスイのからめ」	○			
3. 課題研究事業				
歴史に根ざす課題研究	○			
展示実験に根ざす課題研究	○			
「新日本美術研究会実験による人材育成」	○			
「新日本美術研究会実験による人材育成」	○ ○			
「新日本美術研究会実験による研究者育成」	○			
「科学研究実験による研究」	○			
「歴史教科・学習実践」	○			
4. 教育普及事業				
(1)講演会・ワークショップ				
「越後三才 フラスク美術の逸物 セーヴル、新作の300年」記念講演会森川良輔氏による講演会、計4回				○
「2回目『李真ゴブラン絹画』記念講演会、計4回」				○
「吉川真貴アフターシーン・レクチャー」計2回				○
「石川どうご解説(内村栄助)」計9回				○
「吉川真貴、吉田和也での日焼け肌の話」				○
「吉川真貴解説(誌体向け)」計8回				○
(2)講習会・実習				
「博物学・実習の具体見学の受け入れ」計4校、計4回	○			○
(3)ボランティアによるガイド事業				
「ガイドリーダーの実習」計29回				○
「ガイドに対する研修の実施」計4回				○
5. 各種団体との連携				
パスクー・チラン・シラットの交換研究・両国協力・相互情報提供		○		
「新日本美術研究会・美術学会芸術研究会(連携)」	○			
「フリーペーパー『大阪ヨウジアムズ』発行(連携)」	○			
「キンシ・エヌ・バーズ」	○			
6. 特別の活動等との連携				
国内外の美術館への巡回品の貸出				○
国内外の美術館との意見交換会	○			
シンポジウム・研究会等の意見交換	○			
7. 横断取組・広報宣伝				
「各種博物館、ド・ド・リ・ゼ(Okaya Museum)【連携】」	○			
8. 施設各サービスの向上				
「大阪Free Wi-Fi」への参画				○
多言語対応音声ガイド機のレンタル				○
文化庁補助事業・地域版、ホームページの中西経世作字版の制作				○
高齢者のための音楽鑑賞会、絵本読み聞かせ会等の実施				○
女性セミナーの実施会員登録、会員登録に際しての連携作り				○
会員登録アンケートの実施と連携実施				○
研究室の開設				○
ミュージアムショップの導入				○
9. 施設の特徴・管理				
安全・快適な施設の運営実績			○	
制度体制の充実			○	
10. 出版等事業				
「新日本美術等の著作」	○ ○			
11. 会の会事業				
「会の会選定」の実行(4回)				○
「会の会選定」の実行(4回)				○



## 8. 務務

### (1) 処務事項

第1回理事会（決議の省略）	平成30年4月27日
第1回評議員会（決議の省略）	平成30年5月11日
第2回理事会	平成30年6月4日
第3回理事会（決議の省略）	平成30年6月19日
第2回評議員会	平成30年6月22日
第4回理事会（決議の省略）	平成30年6月23日
第5回理事会	平成31年2月12日
第3回評議員会	平成31年2月19日
第6回理事会	平成31年3月8日

### (2) 理事会及び評議員会に関する事項

会議名	開催年月日	開催場所／開催方法	議題										
第1回理事会	平成30年4月27日	決議の省略	<p>第1号議案 平成30年度第1回評議員会の招集について (1)開催方法 定款第34条第1項決議の省略により開催する (2)議題 評議員の選任について</p> <p>第2号議案 (1)就任予定者 小林大祐（大阪市経済戦略局文化部長） (2)就任予定日 平成30年6月8日 (3)任期 就任日から平成32年6月定時評議員会の終結の時まで</p>										
第1回評議員会	平成30年5月11日	決議の省略	<p>第1号議案 松浦 功評議員の辞任に伴う後任評議員として小林大祐氏を評議員に選任すること 就任予定日は、平成30年6月8日</p>										
第2回理事会	平成30年6月4日	大阪歴史博物館	<p>第1号議案 平成29年度事業報告について</p> <p>第2号議案 平成29年度決算について</p> <p>第3号議案 評議員会の招集について</p>										
第3回理事会	平成30年6月19日	決議の省略	<p>第1号議案 (1)開催方法 定款第34条第1項決議の省略により開催する (2)議題</p> <table> <tr> <td>第1号議案</td> <td>評議員の選任について（追加議案）</td> </tr> <tr> <td>第2号議案</td> <td>平成29年度決算について</td> </tr> <tr> <td>第3号議案</td> <td>理事・監事の選任（再任）について</td> </tr> <tr> <td>報告事項1</td> <td>評議員の選任について</td> </tr> <tr> <td>報告事項2</td> <td>平成29年度事業報告について</td> </tr> </table> <p>第2号議案 吉田 健評議員の辞任に伴う後任評議員として半澤治久氏を候補者とすること ・就任予定者 半澤治久（NHK大阪放送局副局長） ・就任予定日 平成30年6月22日 ・任期 就任日～平成32年6月定時評議員会の終結の時まで</p>	第1号議案	評議員の選任について（追加議案）	第2号議案	平成29年度決算について	第3号議案	理事・監事の選任（再任）について	報告事項1	評議員の選任について	報告事項2	平成29年度事業報告について
第1号議案	評議員の選任について（追加議案）												
第2号議案	平成29年度決算について												
第3号議案	理事・監事の選任（再任）について												
報告事項1	評議員の選任について												
報告事項2	平成29年度事業報告について												

第 2 回評議員会	平成30年6月22日	大阪歴史博物館	第 1 号議案 評議員の選任について 第 2 号議案 平成29年度決算について 第 3 号議案 理事・監事の選任について 報告事項 1 評議員の選任について 報告事項 2 平成29年度事業報告について
第 4 回理事会	平成30年6月23日	決議の省略	理事会の決議があったものとみなされた事項の内容 (1)下記の者を理事長に選定し、代表理事とする。 住所 大阪府大阪市西区土佐堀二丁目3番13-1101号 氏名 横川義郎 (2)下記の者を専務理事に選定し、業務執行理事とする。 氏名 花澤隆博
第 5 回理事会	平成31年2月12日	ドーンセンター	第 1 号議案 公益認定の取消しの申請について 第 2 号議案 基本財産の一部処分又は除外について 第 3 号議案 定款の変更について 第 4 号議案 公益目的取得財産残額の贈与について 第 5 号議案 事業譲渡契約の締結について 第 6 号議案 金銭消費貸借契約の締結について 第 7 号議案 使用貸借契約の締結について 第 8 号議案 評議員会の招集について
第 3 回評議員会	平成31年2月19日	大阪歴史博物館	第 1 号議案 公益認定の取消しの申請について 第 2 号議案 基本財産の一部処分又は除外について 第 3 号議案 定款の変更について 第 4 号議案 公益目的取得財産残額の贈与について 第 5 号議案 事業譲渡契約の締結について 第 6 号議案 金銭消費貸借契約の締結について 第 7 号議案 使用貸借契約の締結について
第 6 回理事会	平成31年3月8日	大阪歴史博物館	第 1 号議案 平成31年度事業計画について 第 2 号議案 平成31年度予算について 報告事項 1 平成30年度第3回評議員会について 報告事項 2 獲得執行の状況について

### (3) 理事及び監事一覧

平成 31 年 3 月 31 日現在

理事長	楞 川 義 郎	(公益財団法人大阪市博物館協会理事長)
専務理事	花 澤 隆 博	(公益財団法人大阪市博物館協会専務理事兼事務局長)
理 事	石 垣 忍	(岡山理科大学生物地球学部生物地球学科教授)
理 事	栄 原 永遠男	(大阪歴史博物館長)
理 事	谷 直 樹	(大阪市立住まいのミュージアム館長)
理 事	出 川 哲 朗	(大阪市立立東洋陶磁美術館長)
理 事	長 山 雅 一	(流通科学大学名誉教授)
理 事	福 永 伸 戯	(大阪大学大学院文学研究科教授)
監 事	伊 藤 由之助	(税理士)

### (4) 評議員一覧

平成 31 年 3 月 31 日現在

評議員	坂 井 秀 弥	(奈良大学文学部文化財学科教授)
評議員	武 田 佐知子	(大阪大学名誉教授)
評議員	多 田 勝 戯	(大阪市教育委員会事務局総務部長)
評議員	西 尾 方 宏	(西尾公認会計士事務所長)
評議員	穂 積 一 郎	(三井住友銀行総務部部長)
評議員	小 林 大 祐	(大阪市経済戦略局文化部長)
評議員	山 梨 俊 夫	(国立国際美術館長)
評議員	半 澤 治 久	(NHK大阪放送局副局長)